HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『南洋時事』研究
Author(s)	亀井, 秀雄
Citation	北大百二十五年史, 論文・資料編, 54-110
Issue Date	2003-02-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30000
Type	departmental bulletin paper
File Information	ronbun_p54-110.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『南洋時事』研究

亀井秀雄

一　『南洋時事』出版まで

志賀重昂は札幌農学校の卒業生のなかで最も早くその存在を社会に認められた人物であるが、彼は明治一九年（一八八六年）二月九日、軍艦・筑波に乗る便宜を得て、品川を出発し、クサイ島（カロリン諸島）、オーストラリア、ニュージーランド、フィジー、サモア、ハワイを廻って、同年十一月二十一日、品川に帰ってきた。

高林公毅[1]によれば、「筑波」はインドのボンベイで嘉永四年（一八五一年）に竣工した、三本マストの木造コルベット（護衛艦）で、排水量は約二〇〇〇噸。三五〇馬力のエンジンは、主に出入港時と航海中の真水蒸留に使われたという。

彼は当時二二歳、丸善書店に、ヘボンの『和英語林集成』第三版（一八八六年）の校正係として雇われていた。民間の一青年が、なぜ遠洋航海の軍艦に「便乗」（志賀自身の言葉。但し、経費は自己負担）することができたの

か、よく分からない。ただ、彼は、その前年の、明治一八年十一月、「筑波」が海軍士官学校生徒の卒業演習のために国内航海することを知って、これに乗せてもらい、対馬や馬関（下関）を廻ってきた。

明治一七年十月、フランスの艦隊が台湾の基隆を攻撃して、占領した。明治一八年六月、フランスと清朝との間に天津講和条約が結ばれて、フランス軍は基隆から撤退したのだが、この一八年の四月には、ロシアの軍艦が済州島を窺っているのに対抗して、イギリスの艦隊が巨文島を占領する。北東アジアの海域には、このような緊張が漲っていたのである。

彼は対馬の大船越で、宿の主人から、文久元年（一八六一年）、ロシアの艦隊が対馬に侵攻した時の様子を聞き、それを現在の状況と重ねながら、「君不見方今五州争湿燥、東洋風気亦不好、無乃前車戒後車、海山咫尺巨文島」と、列強進出の危機感を詠んだ。艦長・福島敬典は彼に好意を持ったらしく、オーストラリア遠洋航海にも便乗したい希望を海軍卿・西郷従道に願い出た時、推薦状を書いてくれた。

志賀重昂は明治一五年七月五日、札幌農学校の二年生の時、札幌で、西郷従道と会って、次のような会話を交わしている。「西郷君ハ絹羽織ニテ袴ヲ履キ、軽靴ヲ穿タレ、巻煙草ヲ吹カレ居ラレタリ。君、其門（開拓使本庁の門）ヲ出ヅ。予、コレニ一揖ス。君、恭シクコレニ礼待シ、予ニ云フテ曰ク先日ハ大キニ、少シお（ママ）出デ。予、ヘイ。君、何処カ御歩行（アルキ）デスカ。予、散歩デ御座リマス。予、貴卿（アナタ）ニハ此処ヘ始メテゞスカ、御巡幸ノ節ニデモ御出デガアリマシタカ。君、イーヱ、始メテデスカラ毎日面白クテ寵愛（薩摩語ナルベシ）シテ歩行シテイマス、貴公（アナタ）ニ（ママ）ハ何ツカラ此地ニお出デゝスカ。予、一昨年カラデ御座リマス」[2]（句読点は亀井）。これはたまたま路上で立ち話をした程度のことに過ぎず、西郷のほうは覚えていなかったかもしれない。ただ、開拓使の廃止に伴なう、政治的な問題の処理に来札した政府の高官と、一介の書生が路上で気軽に言葉を交わす。これは西郷従道の人柄にもよるだろうが、ともあれ、志賀が「便乗」願いを出した心理的な背景には、このような会話の記憶が作用していたこと

は、容易に推測できる。

さらに人間関係を遡ってみれば、彼は明治七年六月から一一年五月まで、つまり一〇歳から一四歳までの四年間、攻玉塾幼年科に学んだ。攻玉塾は、もとは攻玉社と言い、幕府の海軍操練所の教官・近藤真琴が経営する蘭学塾だったが、明治新政府の兵部省が海軍操練所を再開するや、海軍士官の養成に切り替えて、塾を操練所の敷地内に移し、攻玉塾と改称した。ばかりでなく、彼は「筑波」の初代艦長を勤めている。志賀自身は攻玉塾卒業の後、大学予備門に入り、明治一三年に予備門を退学して、札幌農学校に入学したわけだが、攻玉塾の同窓生の多くは海軍兵学校へ進み、志賀の「在札幌農学校第貳年期中日記」によれば、兵学校第一〇期生の広瀬勝比古や武久（名和）又八郎、瀬ノ口覚四郎、三戸与十郎、第一二期生の土屋光金たちとの親交が続いていた。明治一八年の対馬行きは、土屋光金（のち海軍中将）のクラスの卒業航海だった。光金の父、土屋光春は後に陸軍大将にまで進んだ軍人であるが、維新以前は、岡崎藩の藩儒・志賀重職（重昂の父）の門人だった。重昂はこのような縁故に頼んで、西郷海軍卿へ働きかけてもらったのであろう。この経歴と人間関係が、彼に、他の札幌農学校卒業生とは異なる人生を歩ませることになった。

ちなみに、広瀬勝比古の弟、広瀬武夫は明治二四年九月二十日、海軍少尉として練習艦・比叡に乗組んで、品川を出港し、臥夢（グアム）島やオーストラリアのブリスベン、シドニー、メルボルン、ニューカレドニア島、ビスマルク諸島、マニラ、香港を廻って、二五年四月十日、品川に戻ってきた。その日記が、伯爵・松平直亮の手で『航南私記』（明治三七年九月、非売品）として出版されている。

ただし、志賀重昂が南洋航海を志願したのは、必ずしも欧米列強の植民主義的進出に対する、対外的危機感からだけだったわけではない。彼は明治一七年七月、札幌農学校を卒業して、九月、長野県中学校長野本校の教員となっ

たが、翌年の九月に辞めてしまった。原因は県知事の木梨精一郎と衝突したためだ、という。その後上京して、丸善の校正係に雇ってもらったわけだが、この間、ダーウィンの『ビーグル号航海記』を読んで、心を動かされ、みずから「日本のダーウィン」たらんと志した。

札幌農学校の寄宿舎で彼と同室だった渡瀬庄三郎は、のちに東京帝国大学理科大学の教授となった動物学者であるが、農学校の学生時代、ダーウィンの『蚯蚓造土論』(『ミミズの作用による栽培土壌の形成』、一八八一年刊)に熱中していたという[3]。明治一七年に卒業し、教員予備として動物学を修めることを命じられ、この頃東京大学の研究室に通っていた。おそらく二人の交友は再び東京で始まり、渡瀬からの刺激もあったのであろう、志賀は民間の一博物学者として、南半球の地質や動植物や人種や民俗を観察し、記録することを思い立ったのである。

このような動機を持つ人間の海外旅行は、当時はまだ珍しかったらしく、『東京横浜毎日新聞』は、「志賀重昂氏、農学士なる同氏は其専門学実地研究の為自費にて筑波艦乗組の特許を受けたれば、同艦が諸島に寄港する毎に氏は上陸して夫々取り調べを為が目的なりと」(明治一九年一月二十一日)と報じている。彼はシドニーから「南洋巡航日記」(以下、「日記」と略称)と題する記事を、福沢諭吉の『時事新報』に送り、六回(明治一九年五月二十五日、二十六日、二十九日、六月二日、十日、十一日)に分けて掲載されたが、同紙は掲載に際して、「過般筑波艦に搭して南洋諸島に赴きたる農学士志賀重昂氏より左の紀行を寄送されたれば逐次掲載して一覧に供す」と紹介した。彼自身も記事を始めるに当って、「小生儀、今般軍艦筑波に搭し南洋諸島巡航致候に付、途中見聞したる事共を記して貴社に御郵送仕候。尤も、学術上に関して聊か観察稽査致候事件は、別に書綴り、帰朝の後公梓して世の博雅君子の評正を乞ふの所存に候間、此処には勃窣たる理窟は一切相省き、全く日常見聞の事柄丈けを書列ね申候」(句読点は亀井)とことわっている。

農学士という、専門的な知識と視点を持つ人物が、未知の国々の見聞を、現地から報告する。これはそれ自体が

斬新な印象を与える企画であり、事実彼は、カロリン群島のクサイ島（Kusai[ママ]島。別名、Strong島）に関する情報を、まず地理上の位置から始めて、「地勢」「気候」「植物」「動物」「貿易」「人種言語」「制度」「面積人口」「衣食住職業」「開明の程度」などの項目に別けて書き送った。ある民族の生存状況を、このように分割したテーマで記述しながら、その総合的な像を読者のなかに結ばせる。この方法は、その後の「南洋」に関する報告のスタイルを決定したと言っても過言ではない。

文学史的に見れば、それは矢野龍溪の『報知異聞』（『郵便報知新聞』明治一三年一月十六日～三月十九日。同年四月、『報知異聞 浮城物語』と改題して出版）に影響を与えた。これは列強の支配からアジアを解放しようと、浮城（floating castle, 軍艦）で太平洋に乗り出した冒険者たちの物語であり、そのなかの一人が自分たちの行動と見聞を記事にして『郵便報知新聞』に送る、という体裁を取っていた。彼らはフィリピン、ボルネオ、セレベス、ジャワと進み、イギリスとオランダの艦隊を、巧妙な操船と砲撃によって撃退する。この痛快な活躍の間に、地理や先住民の民俗や動植物の詳細な紹介を織り込み、それが新鮮なリアリティを与えたのである。

だが、それはそれとして、『東京横浜毎日新聞』と『時事新報』のいずれも、志賀重昂が農学士であることを強調していた。これは、農学を専門とする学者がまだ珍しかったからであるが、別の面から見れば、博物学という学問が知られていなかったためでもあっただろう。彼はシドニーに滞在中、*The Sydney Echo*という新聞に、"The Japan of Today : The Land of the Mikado"（以下、「現時の日本」と略称）[4]という日本紹介の英文記事を寄稿し、それが一八八六年四月十日、十七日、二十四日の三回にわたって掲載された。同紙はその連載に先立って、四月八日、"'Shigetaka Shiga" was a Japanese gentleman, who in excellent English informed us that he had recently arrived on board the Tsukuba, in the capacity of naturalist.' と紹介している。これによれば、彼自身は、『エコー』紙の記者に対して、

博物学者（Naturalist）と名乗っていたことになる。

ここで一つ注意しておきたいのは、'The Japan of Today : The Land of the Mikado' における 'The Mikado' は二重の意味を持っていたことである。もしこのタイトルを志賀重昂がつけたものとするならば、言うまでもなくそれは日本の帝、つまり明治天皇を指す。だが、もし『エコー』紙の記者がつけたとするならば、それは W. S. Gilbert が台本を書き、Arthur Sullivan が作曲したコミック・オペラ『ミカド』（The Mikado or The Town of Titipu）を念頭に置いてのことだったであろう。というのは、『エコー』紙の記者は志賀に関する先の紹介に続けて、'The picturesque delusion created by Messrs, Gilbert and Sullivan in "The Mikado" vanished for ever. Shigetaka Shiga was not arrayed in robes of curiously wrought fabrics decorated with dragons and strange monsters ; he did not "flat a fan" nor even enter with a gaily decorated sunshade.' と加えていたからである。

一八八五年にロンドンで初演された『ミカド』が、どんなふうにフランスやアメリカにまで及んでいったかは、猪瀬直樹[5]が詳しく追跡調査している。そのコミック・オペラがほとんど間を置かずにシドニーでも上演されたわけだが、右の紹介によれば、この時のミカドはドラゴンや奇妙なモンスターを刺繍した礼服を纏い、派手な装飾の日傘を手にして登場してきたらしい。私はその時代の台本を手にすることはできなかったが、一九二四年に演奏された『ミカド』のピアノ曲の譜面がオーストラリアのブリスベンの図書館に残っており、その表紙には、裾一面に龍を描いた和服の上に、袖の長い羽織を着て、長靴を逆さにしたような冠を頭に戴いた、奇妙な衣裳の人物が描かれていた。また、一九七一年にブリスベンで上演された『ミカド』のパンフレットには、歌舞伎の石川五右衛門が衣冠束帯を纏ったようなミカドや、つんつるてんの袴をはき、裃の上着を着て、髷にリボンを結んだ上に、その髷の先を丸い房にした、珍妙な若者（これは宮廷役人のプー・バらしい）が登場する。時代考証にはまるで関心がなかった、というだけでなく、日本の服装に関するパラダイムに全く無頓着だったのである。

その物語は、〈皇太子のナンキー・プーは、ミカドが選んだ、年上の皇太子妃候補・カチシャを嫌い、宮廷を逃げ出して、旅の楽団の一員に身をやつし、美しい娘のユムユムに恋をする。他方、チチプ（秩父?）の裁判官・ココもユムユムに横恋慕し、ナンキー・プーを亡き者にしようと企むが、滑稽ないざこざの後、ナンキー・プーとユムユムは晴れて結ばれ、ココはカチシャと結婚する〉という、まことに他愛のないものだった。この物語が初演当時からのものだったかどうかは分からないが、要するに作者のギルバート、あるいは演出家たちは、日本や中国に関するエキゾティックなイメージをこね合わせて、大衆的なラヴ・ロマンスを作り出したのであろう。

「南洋巡航紀聞」（後出）によれば、志賀重昂がシドニーに着いた時、すでにハイドパークには四〇人近い日本人がいたが、それは「乞食芝居の役者、喰積めたる茶屋女、傀儡師、芸妓、破落戸」など、「日本人種中にて最下等の摸本とも称すべき人種」だった。『エコー』紙の記者だけでなく、シドニー市民の多くが、これらの人たちや『ミカド』をもとに日本人のイメージを作っていたとすれば、軍艦・筑波の出現は、たしかに 'The picturesque delusion …… vanished for ever.' という、斬新な驚きだったにちがいない。とりわけ志賀重昂は英語を得意とし、'He was clad in the dull conventional garb of an Englishman, even to the high collar and cravat.' という英国紳士の身なりで現われ、そして記者に、"I have just visited your Premier and Mayer." と告げた。その上で、'Talking to your people, I find that they hold very strange ideas concerning Japan and the Japanese. We are not quite the barbarians you may have imagined to be. We are an intellectual and progressive people." と抗議を申し込んだのである。日本という東洋の未知な国から「博物学者」を名乗る青年が訪れ、自分たちと同じ文明を獲得しつつあることを主張する。それが『エコー』紙の記者を驚かした。それ故、もし彼が 'The Land of the Mikado' というサブタイトルをつけたとすれば、それは、「『ミカド』によって皆さんがイメージしている、あの日本という国の、本当の姿」の意味だったのである。

このような経緯で彼は「現時の日本」を『エコー』紙に寄稿することになり、その内容は、明治維新以後の日本

がいかに近代国家の態勢を整えつつあるかを紹介するものだった。この時彼が『ミカド』上演の事実を知っていたかどうか、分からない。ただ、「最下等の人種」という攻撃的な蔑視表現から明らかなように、彼はハイド・パークで見かけた大道芸人たちから不快なショックを受けていた。彼が筆を取ったのは、日本人は彼らとは異なる、'intellectual and progressive people' であることを証明するためであり、それ故、彼にとって 'The Land of the Mikado' は、「聡明な帝のもとで進歩と開明の道を歩んでいる国」の意味でなければならなかった。このことを志賀自身に即して言えば、彼は、近代日本の教育がどのような若い知識人を育ててきたか、それを彼自身の文章の質と内容によって証明しなければならない。そういう緊張を自分に課すことになったのである。

その意味で彼は、日本の読者に対しては農学士の視点で——しかし彼自身は「博物学者」の自負をもって、——南洋に関する学術的な観察を報告し、他方シドニーの市民に対しては、「現時の日本」に関する情報を伝える。そういう双方向的な、複合的な視点を身につけざるをえなかったわけだが、さらに彼は、帰国後直ちに「南洋巡航紀聞」を書いて、新しい方向へ踏み出すことになった。

いわゆる「南洋巡航紀聞」（以下、「紀聞」と略称）は『時事新報』十二月八日から始まり、九日には論説文とも言うべき「日本と濠洲との貿易」を書き、そして十日から再び「南洋巡航紀聞—濠洲瑣談」、十五日「南洋巡航紀聞—濠洲夢物語」、十六日「南洋巡航紀聞—濠洲の前途」、十七日「南洋巡航紀聞—クサイ島人口の減少」と続け、同じ十七日には「日本と濠洲との貿易」に加えられた批判に反論する「ガゼット新聞シガシ某の投書を読みて東京インデペンデント記者に白す」を書き、二十日「南洋巡航紀聞—新西蘭日誌」、二十一日「南洋巡航紀聞—新西蘭日誌五月十三日」と続けていった。その点ではやや性格の異なる文章を含んでいるのだが、ここでは一括して「紀聞」と呼んでおきたい。

では、「紀聞」のどのような点に「新しい方向」が見られるのか。マサコ・ギャヴィンの研究[6]によれば、彼はニュージーランドの師範大学（Teacher's College）で講演を行ない、また、*The NewZealand Mail* という新聞のインターヴュを受け、その内容が同紙の五月二十一日号に、"New Zealand and Japan : A Japanese Naturalist" というタイトルで紹介された。そのなかで彼は、赤道を挟んで対照的な位置にある、日本とニュージーランドとの地理的・地形的な類似点を挙げ、ニュージーランドの地味が肥沃であることを称賛し、日本との貿易においては羊毛が有望な輸出品となるだろうことを指摘している。このような識見を持つ人物が、日本という国から訪れたこと自体が、『ニュージーランド・メイル』紙の記者にとって新鮮な印象だったらしい。「日本は優れた学者を世界の各地に派遣して、産物を調査し、貿易の可能性について情報を集めている」。記者はそのように受け止め、志賀という青年は明敏な観察力を備えた紳士で、その使命をよく果している、と称賛した。彼は産業と貿易の観点から、あるべき日本を構想する、政治的設計者へと歩み出したのである。

彼は右のような記事と、このような経験をベースとして、明治二〇年四月、『南洋時事』を丸善商社書店から出版した。帰国してから僅かに五カ月後のことであり、「自序」の日附（二月二十一日）から数えれば、三カ月足らずで書き上げたことになる。当然のことながら、その全てが書き下ろしだったわけではない。「日記」の五月二十五日と二十六日の記事から、それぞれ一部を採って「克撒以嶋ノ地形」の章とする。「紀聞」の「クサイ島人口の減少」は「克撒以嶋土人ノ減少」と改め、そして「日本と濠洲との貿易」、「濠洲夢物語」、「濠洲の前途」は、タイトルもそのまま採り入れる。さらに、「新西蘭日誌」の一部を採り、先のインターヴュで語ったことを肉づけする形で「新西蘭ト日本」の章を書き、「新西蘭日誌五月十三日」の一部を「新西蘭ノ酋長維太哥氏（ウヰタゴ）トノ談話」の章に入れている。

その上に、「自序」「緒言」「南洋ハ多事ナリ」「南方ノ好隣国」「巴拿馬（パナマ）運河ト南洋経済トノ関係」「日本貿易家ノ

参考ニ供スベキモノアリ」「我爾徳斯彌斯（ゴールドスミツス）氏ノ荒村感懐（"Deserted Village"）ノ詩ヲ読ミテ感アリ」「菲西（フィジー）島、蘭峨（ランガ）謨（ム）長老ノ話」「丹峨羅亞（タンガロア）神霊ノ夢物語」「撒毛亞（サモア）国王ニ謁スルノ記」「布哇国ト日本」「布哇在留日本移住民」「明治十九年九月十五日布哇嶋甲哇（カワイ）客舎書感」「自跋」などを書き加えた。こうして成ったのが、『南洋時事』なのである。

二　評判と評価

以上のような経緯で出版された『南洋時事』について、かつて私は、「当時の日本人の多くが、西洋／東洋という枠組みで世界像を描いていたのに対して、志賀は『南洋』という、いわば第三世界の問題を提示して、世界像の転換を促した。彼はそれをリアライズするために、『新西蘭（ニュージーランド）ノ酋長維太哥（ウキタゴ）氏トノ談話』や『丹峨羅亞（タンガロア）神霊ノ夢物語』などの章を設けて、先住民の立場から殖民状況を描いた。その点では、世界の被抑圧民族の連帯を構想した東海散士の『佳人之奇遇』（明治一八年）の南洋版と言うべき性格を持つ」と評価した(7)。「亡国の遺民」から彼の民族の運命を聞き、わが民族の運命に想いをめぐらす語り方の点でも、『佳人之奇遇』との類縁性は明らかである。この評価は現在も変わらないが、ただ、当時の反響に即して言えば、多少補足的な訂正が必要だろう。というのは、再版（明治二〇年十月）の附録に紹介された「初版南洋時事諸新聞批評」を見るかぎり、彼の危機感が伝わったとは言えないからである。

『南洋時事』初版の発行部数は分からないが、わずか半年後に再版を出し、しかも附録として紹介された書評は一七を数え、そのなかには *The Japan Mail* の英文書評もある。これらによっても反響の大きさを窺うことができるが、では、当時の読書人はどのような点に反応したか。一つには、オーストラリアやニュージーランドが貿易対

象国として、いかに可能性に充ちた「好隣国」であるかを教えられたことであり、二つには、実学的な観察と、美的な描写と、述志とを兼ね備えた、その記述態度の斬新さに対してであった。

特に後者に関しては、「此書ハ、著者ガ南洋ヲ巡遊シテ親シク実地ニ就キ、見聞ニ触レシ事ノ、苟モ工業上殖産上ニ於テ、我邦ニ関シ及ビ南洋大勢ニ関スル事柄ハ記シテ漏スナク、論シテ尽サヽルナキ一部ノ南洋大勢論ト云フヲ得ベク、貨殖篇トモ云フベキ書ナリ。書中間々著者カ経歴ノ際ニ得シ快活ナル詩ヲモ載セタリ」(『報知新聞』)や、「南洋群島ノ地理ヲ説ク所ハ明細ナル地図ヲ見ルノ思ヒアリ、其山水風物ヲ序スル所ハ画人ノ実景ヲ模写シタルガ如キノ妙アリ、而シテ之ヲ貫クニ慷慨悲愴ノ精神ヲ以テシタル者ナレバ、読ム者ヲシテ好風名月ノ間ニ逍遥シナガラ南洋ノ地理人情風俗ヲ知ラシムルノ良書ナリ」(『毎日新聞』)など、どの書評もほぼ一致して称賛していた。実地の観察に基づいて、大勢を察知し、あるべき将来を志向して着実な立論をなす。徳富蘇峰の「観察」(『国民之友』第一八六号、明治二六年四月。発表時は無署名)を見れば分かるように、この論述態度は、当時の日本の知識人にとって、自分たちが獲得すべき近代精神そのものと見なされていた。これを獲得することなしには、外面的な西洋模倣を超えることはできない、と考えたからである。彼らはそのいち早い実現を『南洋時事』に見出したのであり、さらにその上、「且ツ文章ハ一種ノ趣味アリテ斬新ニシテ面白シ、而シテ巻中驚クニ堪ヘタルハ数多ノ詩ヲ挿ンタルコト是ナリ。此ノ一点ヨリスレハ題号ヲ改メテ南洋新詩ト云フモ盖シ不可ナカルヘシ」(『国民之友』。以上の引用における句読点は亀井)。当時の読書人が受けたインパクトは、まさにこのような点にあったと言えるだろう。

しかし、辛口の批評がなかったわけではない。その代表的なものに、長頭迂夫の「南洋時事」という長文の書評(『出版月評』第一号、明治二〇年八月)がある。志賀はクサイ島の人口の減少を論じて、欧米列強の植民主義的

蚕食が日本にも及びかねない危機を警告し、アジアの保全のために、「支那」と連携することを説いていた。それに対して長頭迂夫は次のように反論している。

> 著者ハ此惨状（クサイ島の先住民の惨状）ヲ観テ悽然トシテ恐ル、モノ、如ク、黄、黒、銅色等ノ人種モ遂ニ滅亡ノ期アランコトヲ憂ヒ、吾人モ亦「性命ヲ保維スルノ策ヲ講セサルヘカラサル」コトヲ陳ヘ、我国ノ支那ト協同連盟シテ兼テ「英国ト気脈ヲ通スル」ノ良策タルヲ論セリ。嗟呼是レ何ノ言ソヤ。好シクサイノ蛮民ハ実ニ白人ノ為ニ疫病ヲ伝ヘラレテ竟ニ剿絶スヘシトスルモ、豈此ヲ以テ直チニ我同胞ヲ戒ムルコトヲ用キンヤ。（中略）今一歩ヲ譲リテ我儂黄色人種ハ此点（体質）ニ於テ白人種ニ劣ルトスルモ、是レ唯交通ノ為メニシテ、殺戮ノ為ニアラス。独立ノ為ニアラス。然ラハ之ヲ救治スルノ策ハ数量ノ論ニアラスシテ、品質ノ問ニアラスヤ。隣保結托ニ在ラスシテ箇々衛生ニ在ラスヤ。蒲柳ノ質ヲ変シテ銅身鉄骨トナスニ在ラスヤ。余ハ啻ニ彼ノ肥大ナレトモ柔弱ナル、年長ナレトモ硬頸ナル黄人種ノ国ト協同スルノ利ヲ発見スルニ苦ムノミナラス、借如利アルヲ知ルモ其実行ヲ疑フモノナリ。我同胞人種ノ保維ヲ計リテ「英国ト気脈ヲ通スル」トイフカ如キハ又何ソ言フニ足ラン（句読点は亀井）

文中の「彼ノ肥大ナレトモ柔弱ナル、年長ナレトモ硬頸ナル黄人種ノ国」が「支那」を指すことは言うまでもない。長頭迂夫の見るところ、もはや「支那」は救いようがないほど弱体化してしまったのである。この反論は彼が危機感と無縁だったことによるであろう。

「新西蘭ノ酋長維太哥（ウキタゴ）氏トノ談話」によれば、志賀はニュージーランド滞在中、先住民・マオリの信望篤い人物と話し合う機会を得た。この人は、「十数年前マデ此地方ヲ所領セシ強大ナル酋長ニシテ、現時尚広大ナル家産山

林ヲ保有セリ。氏ハ新西蘭政府上院ノ議員ニシテ英語ニ通ジ兼テ聡敏ノ名アリ」という人物だった。その人物が、英人と戦って敗れ、「我国ノ滅亡」を早めた経緯を語って、志賀に「日本ニテハ英国人ト戦争ヲ為シタル事アリヤ」と訊ねた。それに対して彼は、「日本ニテモ二十年前迄ニハ貴国ノ如ク各所ニ酋長ノ如キモノアリテ、数十里ノ領地ヲ有シ数百千ノ部下ヲ保チタル侯伯アリタリ。其侯伯中ニハ英人ト小戦(コゼリアヒ)ヲ為シタルモノアリタレドモ、幸ニ大事ニ到ラズシテ、外人ノ侵略ヲモ被ラズ」と答えている。つまり彼は、日本の藩主たちを酋長になぞらえて説明し、そのことによって、改めて、つい二〇年ほど前の日本とニュージーランドとがおなじ状況にあった事実に気がついた。薩英戦争や、長州と英・米・仏・蘭の連合艦隊との戦闘は、その展開次第によっては、日本の植民地化を結果したかもしれない。そう思い当たって、彼は「今日ヨリ当時ヲ追想スレバ毛髪モ竦然タル計リナリ」と、危機感を甦らせたのである。

文久三年に生まれ、明治維新後に教育を受けた志賀が、「当時」を「追想」しうる記憶を持っていたはずはないが、このようにして彼は、維新前夜の状況を自分の「記憶」に取り込んでいった。換言すれば、この対話は、近代の博物学者を自負する青年に、維新の志士のパトスが棲み憑いた瞬間を語った場面と言えよう。そこから「嗚呼日本モ亦竟ニ新西蘭ナル哉。（中略）嗚呼予輩日本人民ハ新西蘭ノ宗社覆滅ノ活劇ヲ目撃シテ、心私ニ猛省スル処無カル可ケン哉」と、パセティックな言葉を発したわけだが、長頭迂夫の批評は、次のように、ほとんど冷笑的であった。

> 南洋時事論ハ愛国ノ精神ヲ以テ充填シ、溢レテ慷慨ノ海ヲナスモノ亦頗ル多シ。是レ其目撃耳敲スル事物ハ一トシテ其カ憤憂ノ資料タラサルハナキニ由ルナラン。余特ニ之ヲ其第十二ナル「新西蘭ノ酋長『ウヰタコ』氏トノ談話」ニ於テ見ル。此章ニハ、新西蘭ノ滅亡シテ今日ニ至リタルハ英国ト相戦フテ常ニ敗ヲ取リ、漸ク

国土ヲ蚕食セラレタルニ由ルコトヲ述ヘ、日本モ亦転覆ノ虞ニ備ヘサルヘカラスト言フモノ、如シ。嗟呼何ソ其言ノ不吉不祥ナルヤ。苟モ此文意ヲシテ蘭国土蛮ノ戦滅ヲ以テ直ニ我国ヲ推スモノトナセハ、余ハ唯之ヲ杞人ノ憂トシテ歯牙ニモ掛クルコトナカルヘシ。然レトモ、若シ之ヲシテ現時我社会ノ世態風俗ヲ変革シツヽアル彼ノ舞踏会ヤ、女男交際ヤ、国語ノ改革ヤ、其他所謂改良ト称スル新事物ヲ以テ深ク憂フルモノトセハ、余ハ将ニ謂ハントス、「殖産興業」カ此好新狂ヲ治ムルニ足ラサルハ猶葛根湯ノ瘋癲ニ於ケルト一般、絶エテ寸効ナキノミナラス、適以テ其症ヲ助長スルコトナシトセス、宜ク其勢極リテ症候一変スルノ機ヲ覗ヒ毅然タル国手ヲ俟テ反正ノ剤ヲ投スヘシ、ト（同前）

じつを言えば、志賀が報告する南洋諸島の被植民状況に反応した書評は、一七篇のうち僅かにこれだけであった。この点に関するかぎり、彼の危機感と警告は黙殺されるか、あるいは冷笑をもって遇されるだけだったのである。南洋諸島の先住民の状況に対する、これが当時の一般的な反応だったのであろう。

ただ、それはそれとして、この書評は別な事実を伝えている。

明治二〇年前後、何らかの形でナショナリズム的な発言がなされた場合、これを鹿鳴館に象徴される軽薄な欧化主義的風潮に対する批判と意味づける。これは戦後の歴史研究者の常套的な解釈であるが、この書評はその先蹤例だったと言える。『南洋時事』初版からそのようなモティーフを読み取ることはできないのだが、長頭迂夫は欧化主義／国粋主義というグランド・ナラティヴのなかに『南洋時事』を持ち込み、その上でこの著書の無効性を宣告してみせたのである。

およそ以上が『南洋時事』の同時代評であるが、戦後の研究と評価は、大きくは「日本の帝国主義」という枠組

みのなかで、もう少し限定して言えば、「南洋進出論の系譜」という枠組みのなかで行なわれてきた。これは近代日本の対外的なライト・モティーフを、植民地獲得とする見方から生れた枠組みであり、このため「進出」はしばしば「侵略」と同義語化されてきた。戦後の近代史研究が日本の帝国主義的膨張政策に対する反省と批判から始まったことは言うまでもない。

ただし、実際に南洋進出論的な言説を調べてみれば、そのなかには多様な、時には相対立する発言が見られる。戦後の研究は、その多様性を重視して、平和主義的／侵略主義的、移民／植民、棄民的移・植民／略奪的移・植民、政治的侵略／経済的侵略など、南洋進出論を下位分類するための、概念設定に集中していった。だがまた、それに対する反作用の形で、大きな枠組みに回収できる側面を取り出し——ということはつまり、個々の言説意図の差異を捨象して——それが歴史的に果してきた客観的・イデオロギー的な役割の問題に引き戻そうとする、そういう研究が間歇的に現われている。最近のポスト・コロニアリズムによる研究には、「帝国主義」を「帝国意識」に置き換える傾向が見られるが、取り扱う手続きは基本的に変わっていない。

例えば森久男[8]は『南洋時事』を、旧士族の「空想的南進論」の一つに数え、「日本人のオーストラリア進出を説いた」と位置づけている。これは大きな枠組みを先行させた、歴史的な位置づけの一例と言えるだろう。「進出」という言葉の規定も曖昧なまま、オーストラリアの場合にまで当てはめてしまっているからである。

同様の速断は前田愛[9]にも見られる。彼は『南洋時事』の増補三版（明治二二年十月）に収められた附録の「台湾論」から、「思ふに我鎮西の地脈奔りて薩摩に止り、折れて近洋に入り、琉球群島を経、忽ち台湾に到りて崛起したるものなり。真箇に台湾の地勢は宛然我が版図に在り」という言葉を取上げて、次のように結論した。「この引用はその後の彼の地理学が辿る方向を予示しているように思われる。侵略主義、土地兼併主義の根拠として、自然環境を援用する志向である」。最近では佐藤能丸[10]が同様のことを論拠として、「これ以降、志賀は地理学的考察を根

拠として国粋主義の宣揚に努め」「日本の帝国主義と歩調を合わせて」いったととらえている。

しかし、志賀重昂はオーストラリアとの貿易促進を説いただけであって、移民的進出さえも説いてはいなかった。彼はパナマ運河が完成した場合、「南洋経済」に大きな変化が生ずるだろうことを予見し、その新しい経済環境にどう対応するか、「我国有為ノ資本家請フ奮起セヨ」と呼びかけたが、これは「進出」論と呼ぶか、「防衛」策と呼ぶか、論の別れるところであろう。他方、彼はハワイ移民の可能性を構想し、そのために日本人労働者の資質の改良を説いている。ただ、その説くところは、ハワイ総領事安藤太郎が外務大臣に提出した「報告書」に依存し、むしろ彼自身の目的は、各新聞が伝える「日本ノ移住民ガ布哇ニ在リテ虐使苛遇到ラザル無キ」という風聞を打ち破ることにあった。「蓋シ這般ノ誤聞虚報ハ移住民中ノ書生演説者等ノ手ニ出デタルモノニシテ、這輩身躰懦弱、資性懶惰、文筆口舌ニ巧ニシテ労働使役ニ堪ヘズ、時ニ或ハ監督者ノ呵責ヲ被フリ心私ニ不平ニ禁ヘズ竟ニ這般ノ造語ヲ以テ本邦ニ告知シタルモノナランカ」と。

彼の批判は、実地を踏まない口舌の徒の対外膨張論にも向けられてゆく。

予輩毎ニ英国ノ軍艦ガ煤煙ヲ薫ラシ国旗ヲ海風ニ翻ヘシテ宇内到ル処ノ港湾ニ入リ来レバ、所在ノ英国移住民ハ盛粧炫服シテ或ハ馬ニ跨リ車ヲ駆リテ誠実熱心ニコレガ好来ヲ迎フルノ状況ヲ目撃シ、心私ニ癢痒ニ勝ヘザル処アリ。然レドモ予輩ハ兼併主義ヲ懐抱スルモノニ非ラズ、植民政略ヲ唱道スルモノニ非ラズ、唯海外到ル処ニ我同胞ノ移住散在シテ商業ヲ営ミ農事ニ服センコトヲ奨説スルモノナリ。海外到ル処ニ大和民族ガ莞然タル温顔ヲ見ンコトヲ冀望スルモノナリ。海外到ル処ニ商業的ノ新日本ヲ釈造センコトヲ希願スルモノナリ。（中略）世ノ壮士ヨ、旅館ノ二層楼ニ在リテ徒ニ空々タル妄想ヲ抱キ欲呑支那四百州ノ句ヲ誦ンゼズシテ、請フ徐ニ図ル処アレヨ。漫ニ空中ノ城楼ヲ築クコト莫レ。漫ニ国姓爺ヲ学ブコト莫レ。漫ニ山田長政ヲ学ブコト

莫レ。海外到ル処ニ商業的ノ新日本ヲ粗造スルコソ、汝ガ今日ノ急務ナレ、汝ガ今日ノ急務ナレ。

彼の実学的精神のよく現われている箇所であり、彼の改良意識は日本人労働者の資質だけでなく、ここに描かれたような大言壮語好きの「壮士」にも向けられていたと見ることができる。この資質改良論を海外進出の条件整備論と解釈し、「海外到ル処ニ我同胞ノ移住散在シテ商業ヲ営ミ農事ニ服センコトヲ」のような抽象的な議論をも「膨張」論ととらえるならば、「進出」論と呼ぶこともできるだろうが、少なくとも彼がアクティヴな対外策を説いていたと言えるのは、僅かに対濠貿易とハワイ移民だけであった。

この特徴は、翌年の、明治二一年に書かれた菅沼貞風の『新日本の図南の夢』と較べてみれば、さらに明らかだろう。

然らば則我国は遂に植民拓地の業を休めて其疆域の中に退守し、依然たる旧日本を以て自ら安んずべしとするか。是何ぞ然らんや。請ふ少しく眼を放つて宇内を回顧せよ。天公は日本を恵する殊に大にして、日本に向て崛強の好版図を与ふることを発見するは敢て難きにあらざるべし。吾人は既に支那を引て我国の同盟となし、朝鮮暹羅を助けて我国の与国となし、以て東洋の勢力を連結し以て白人の跋扈を拒がんとするものなり。然れども凡そ一物を連結して之を運転せんとするには必一个之が中心の機軸たるものなからざるべからざるは勿論にして、吾人果たして東洋を連結するの雄図あらば我国をして之が中心の機軸たらしむるの奇策なかるべからざる也。看よ独逸の帝国は普魯西之が中心の機軸となるありて始て之を組織するを得たるにあらずや。内には支那と勢禁形格して我国の頤使に服従せざる能はざらしめ、外には白人を挫折して其跋扈の気を沮喪せしむるに足らしむるには、民を海外に植し、地を宇内に拓くの外また其策なかるべし。而して天公は我国にこの崛強

なる新版図を与へんと欲し、他人の或は之を草竊せんことを畏れて姑らく之を或者に預け置き、以て我国が之を取るの日を待てり。此の如き天意豈に之を空ふすべけんや。吾人は意謂らく、我国の盛衰興廃は実にこの新版図を開くと否とに決するものなりと。

この新版図は所謂「太平洋の西、印度洋の東、支那海の南、大洋州の北数多の嶋嶼相群れる中にある」もの実に是なり。

つまり彼の言うところによれば、所謂南洋諸島はもともと日本の版図なのであり、天が一時それを他人に預けておいたに過ぎない。この版図から白人を追い出すには、支那や朝鮮や暹羅のように独立国の体裁を保っている国を援助しなければならないのだが、それはこれらの国を日本の協力国とし、日本の顕使に服従させるためなのである。

この見事なまでに虫のよい自国中心主義を実現するために、どのような方策がありうるのか。彼の構想によれば、まず外債を募って百艘の軍艦を作る。その結果巨額の借金を抱えることになるだろうが、百艘の軍艦の圧力によって欧米諸国に不平等条約を撤廃させ、日本が自主的に輸出入の税率を定めるようになれば、数年のうちに借金は返済できるはずだ。こうして獲得した軍事力をもって、南洋諸島を領有する植民地勢力に圧力をかける。たとえその本国が日本に優る軍事力を擁していたとしても、南洋植民地の保護のために割くことができる海軍はごくわずかでしかない。「縦令其本国をして大に之を争はしむるも、其発遣し得べき艦隊は二十余艘に過ぎざるべし。我国既に百艘の堅艦を有せば何ぞ之を破砕するに苦しまんや」。

要するに相手の褌で相撲に勝とうというわけであるが、良かれ悪しかれ志賀重昂という青年は、このような気宇壮大な「夢」、いや、「妄想」とは無縁だった。「空想的南進論」という規定は菅沼貞風には当てはまるかもしれないが、志賀重昂には無理があるだろう。前田愛の場合は、初めから志賀を帝国主義者、侵略主義者、植民主義者と

規定した上で、『南洋時事』の全体からでなく、増補三版の附録から片言隻句を拾い出して、その裏づけとしてしまったのである。

ただ、視点を変えれば、これらの速断に、歴史研究の過誤がよく露呈していると言えなくもない。

もともと前田愛の論文は、志賀重昂の『日本風景論』を対象としたものだった。志賀重昂は日露戦争の時、乃木希典を司令官とする第三軍に、観戦員として従軍したが、明治三八年の元旦、二〇三高地を旅順富士と別称することを、第三軍司令部に提案した。志賀自身の言葉を借りれば、「二〇三高地が新たに何んと附名さるゝにもせよ、旅順富士と別称し、以て島帝国の勢力を大陸に拡大せしことを顕示するに於て何の不賛成者かあるべき」(『大役小志』明治四二年)というわけである。前田愛はこのエピソードを取り上げて、『日本風景論』のとらえ方を以下のように提案した。「この提案は児玉大将以下の署名を得たにもかかわらず、結局立ち消えになったらしい。乃木将軍の命名した爾霊山の字面には及ばないからである。それにしてもこの提案は、朝鮮や台湾の植民地に神社を建設した、戦前の為政者の発想と奇妙なほど一致している。『日本風景論』の本質は、この命名劇から逆に解きあかすべきではないだろうか」と。先の『南洋時事』評価は、この方法を更に『南洋時事』にまで遡らせたものだったのである。

ある出来事を因果律でとらえる場合、結果から遡及的に原因を探り出す。歴史研究はしばしばこの方法を取り、その意味では、結果が出発点であり、「過去」はその到達点なのであるが、時系列的なとらえ方を基本とする歴史研究では、この順序が逆になってしまう。つまり、到達点としての「過去」から、出発点の結果が生れたように説明してしまうのである。

このような研究が如何に陥穽に充ちているか、いま挙げた一、二の例でも明らかだろう。ある出来事を研究的関心の対象とする時、その仕方のなかに、研究者自身の歴史的大状況物語(グランド・ナラティヴ)が既に働いており、だから、探り出された

原因は、彼の歴史的大状況物語（グランド・ナラティヴ）に都合よく適合するものでしかない。時には、ありもしなかった原因を「探し出して」しまう。しかも、このようにつまみ食いをし、捏造した、「過去」の原因を、その事柄の「本質」にしてしまうのである。それにもかかわらず、歴史研究者がこの陥穽に気がつかないのは、自分（たち）の作った歴史的大状況物語（グランド・ナラティヴ）を客観的な認識と錯覚しているからにほかならない。

もちろん私たちに何らかの歴史的大状況物語（グランド・ナラティヴ）が働かなければ、そもそも何事かを研究対象に取上げることは起こらない。このことは否定できないが、その研究が右のような陥穽に陥らないためには、取上げた事柄と対話を重ねてゆく必要がある。対話とは、その事柄を鏡として自分の歴史的大状況物語（グランド・ナラティヴ）を対象化し、相対化して、歴史的大状況物語（グランド・ナラティヴ）を組み替えてゆくことであって、時にはその廃棄を迫られる場合がある。もしこの対話を欠くならば、歴史的大状況物語（グランド・ナラティヴ）は単なる煽動的で、無責任なイデオロギーに転化してしまう。対象からこのイデオロギーとのかかわりのありそうなものを拾い出して、過剰にイデオロギー的な意味づけをし、あたかもそれが対象の「本質」であるかのように強弁する過ちを犯してしまうだろう。

ところで、矢野暢[11]は先ほど紹介したような『南洋時事』の特徴に注目して、志賀の移民論を「平和主義的ニュアンス」と言った。広瀬玲子[12]は、しかし平和的／侵略的という二分法が成立つかどうか、疑問を提出している。この二分法の一番分かり易い標識は、菅沼貞風のように、軍事力を背景に立論していたか否かであろう。その点から見れば志賀は軍事力依存の発想を持っていない。だが、広瀬玲子によれば、「そもそも移民・植民なるものは、他人の土地へと入り込むことで成立するものであり、いかなる形であれ入り込まれる側は何らかの圧迫を感ぜざるを得ない」。ここから、「経済的侵略主義」という規定が生まれる。

現在のグローバリゼーション批判を念頭に置いたと思われる、このとらえかたは、志賀の発言を大きな枠組みの

なかに再統合しようとしたものと言えるだろうが、しかし、「経済的侵略」とはどういうことを指すのか。それと「経済的進出」とを、どう区別するのか。志賀の時代における、その現実態と可能態とを考えてみれば、この視点の観念的虚構性はたちまち明らかだろう。

志賀の目撃したハワイの現状は次のようなものであった。

予嘗テ布哇国会ノ議事ヲ傍聴シテ句アリ曰ク、彭頬漫論公債策、諸公他日奈蒼生ト。之ヲ要スルニ布哇国ノ内情ヲ緻カニ撿覈スレバ、時ニ或ハ人ヲシテ自失セシムルモノアリ。其裁判所内ノ状況、国会議員投票ノ状況、○○ノ内情ノ如キハ実ニ吃驚スルニ勝ヘタルモノアリト云ヘリ。如之布哇政府ノ内閣ハ総理大臣「ギブソン」氏（米国人。）ヲ始メトシ悉ク白哲人種（ママ）ヲ以テ組織シ、（大蔵尚書「カペナ」氏ハ独リ土人ナレドモ洋語ニ通暁セザルヲ以テ、内閣会議ニテハ毫モ権力アルコト無シ。）且国会議員モ亦大半ハ白人ナリ、（議長「ウヲカー」氏ハ蘇格蘭ノ人。）高等裁判所長モ白人ナリ、国内砂糖製造所ノ持主モ亦悉ク白人ナリ、国内土地ノ強半ハ業既ニ白人ノ占有ニ帰シ、国内ノ雑商業、雑農業ハ悉ク支那人ノ手ニ属シ、布哇人ハ唯其間ニ生息シテ朝三暮四僅カニ糊口生計ヲ経営スルノミ、之ヲ要スルニ布哇ノ政治財本ハ悉ク白人支那人ノ手ニ属シ、独立ノ名アレドモ実無キガ如ク、真箇ニ蝉（セミ）ノ脱殻（ヌケガラ）ニ似タル者ト云フ可シ。

「経済的侵略」とはこういう「蝉（セミ）ノ脱殻（ヌケガラ）ニ似タ」事態を指すのであろうが、もしそうだとすれば、志賀の構想のなかにそれはなかった。彼は日本がこのような事態に陥ることを恐れ、そして「布哇ニ移住民ヲ遣出スルノ利害」に関しては、「第一　日本人民下等社会ガ其職業ニ就クヲ得ルコト」「第二　日本下等社会ニ規律的ノ労働法ヲ開導スルコト」「第三　日本国ノ資本ヲ増殖スルコト」「第四　日本下等人民ニ冒険進取ノ気象ヲ涵養シ、兼テ其知識ヲ

増殖スルコト」を説いているだけであった。要するに、ハワイへの移住を日本人労働者の教育機会ととらえ、「高貴ナル賃銭ヲ得テ漸ク生計上ニ余綽ヲ生ジ、為メニ本邦ノ物産ヲ取リ寄セ盛ンニ之ヲ注文スル」場合の経済効果を考えていたにすぎないのである。

以上は僅か五、六例に過ぎないが、『南洋時事』に関しては、このように、批判的評価に対する反論、反論に対する再反論が繰り返されてきた。これは視点や問題設定の違いから起こった面もあるが、それだけでなく、『南洋時事』というテクストが複雑な過程を経て成立したため、極めて多義的で、重層的な意味作用を持ち、時には相矛盾する発言が併存するからにほかならない。その上志賀重昂は版を改めるに際して、かなり大幅な書き換えや加筆を行なった。増補三版については既にふれたが、再版の際にも何箇所か、大幅に加筆している。このため、どの版を使うかによって、内容や印象が異なり、研究者は同じテクストを論じているつもりで、じつは異なる内容を根拠に議論するという事態が生れてしまうのである。

その意味では、『南洋時事』のテクスト性がまず解明されなければならないはずだが、これまでの研究者、とくに歴史学（思想史を含む）の研究者にはその問題意識がなく、方法も持たなかったように思われる。

テクスト性の問題でもう一つ注意しなければならないのは、後述するように、志賀重昂はクロス・ジャンル的な書き方を駆使し、対話的な場面を多く設定している点である。だから当然、それは、ジャンルそれ自体の意味作用や、対話的場面において誰を発話主体としているか、書き手以外の発話主体を設定した理由は何か、などの問題に対する関心を必要とする。この関心を抜きに構造的な読みはできないはずなのだが、歴史研究者はそれらの発話を一元化して、書き手の意見に還元し、モノローグ化してしまい、そのイデオロギー性を抽出することしかできなかった。先に指摘した、歴史研究者における歴史的大状況物語（グランド・ナラティヴ）のイデオロギー化がこれに対応することは、言うまでも

ない。

しかし最近、このような枠組みを超える、またはこの枠組みから解放された問題設定の研究が現われてきた。水野守[13]と、マサコ・ギャヴィン[6]の研究である。水野守は、「『帝国の時代』における日本の自他認識を考察する」作業の一環として、『南洋時事』を取り上げ、志賀の記述の仕方そのものに眼を向けていった。その記述を、「志賀の植民地争奪の場『南洋』への旅立ちから帰還のプロセスを、世界的な『帝国の時代』の渦中に存在することを自覚しつつなされた他者との出会いと葛藤の過程としてとらえ」るためである。この着眼と方法によって、彼は『南洋時事』というテクストを、「単に観察者と被観察者との二項対立に収斂させ」、それを「宗主国と植民地といういわば内と外の関係」に置き換えて、能事足れりとする、図式的な「帝国」論を批判した。ただ、その方法を徹底させてゆくならば——あるいは『南洋時事』の志賀という青年から逆に眼差されている立場を自覚しつつ、対話的な読みを深めてゆくならば——「帝国の時代」という歴史的大状況物語（グランド・ナラティヴ）そのものが崩れざるをえないだろう。

他方、マサコ・ギャヴィンは、オーストラリアやニュージーランドの資料を精査して、『南洋時事』の基本的な性格を、ダーウィンの「適者生存」（Survival for the fittest）の理論を実地に確認する旅の記録ととらえ、植民主義や侵略主義と断定するような読みは成り立たないことを指摘した。

本研究はそれを踏まえているが、水野守が見落とした『南洋時事』の構造と、このテクストを志賀が書き換え、加筆する過程で起こった認識の変容に注目しながら、分析を進めてゆく。同時にそれは、志賀のダーウィニズムが果たして一貫したものであったかどうかの検討にもなるはずである。

三　『南洋時事』の諸相

このような問題を孕む『南洋時事』を評価するには、それに対応する解読の方法が工夫されなければならないのだが、ここでは彼の寄港順序に従って、その土地の報告や論議からそれぞれ個別の主題を取り出して、彼の認識がどのように動いていったかを整理したい。彼は同じ事柄を航海中に書き、帰国後に書き換え、しかも版を改めると共にまた書き換えている。つまり彼の認識の動きは、空間的な移動だけでなく、書き換えのプロセスにも見られ、その両面からを読み解かないかぎり、『南洋時事』の内実は見えてこないからである。

（一）「人種」の問題

軍艦・筑波は明治一九年二月二十六日、カロリン群島のクサイ島に近づいたが、港には入らなかった。飲用水と果実を補給する目的だったが、あいにく強い貿易風に妨げられて、港に近づくことができなかったためである。おまけに、この島は現在、赤痢などの疫病が流行っているという。やむを得ず上陸を見合わせていたところ、「コラ村の酋長トラザー」と「サンセン」なる人物が訪ねてきた。先に紹介した、クサイ島に関する「地勢」以下の報告は、この二人から聞いたことと、「自ら携帯せる書類を参考にして」書いたものだが、そのなかで彼はクサイ島の人口の減少を次のようにとらえている。

> 人口は、千八百七十年英国刊行の水路誌には七百とあれど、現時は三四百の間なる由。然るにサンセンの言に拠れば、二箇月以前より瘟疫赤痢の伝染病盛んに行はれて、為めに大に人口を減殺したりと云ふ。蓋し劣等人種が優等人種に接するときは、百事之と競争する能はずして、漸く人種の消滅するに至るは、万物化醇自然淘

汰の大法なれば、之を如何ともする能はざるなり（句読点は亀井。以下「日記」「紀聞」からの引用も同じ）

『ビーグル号航海記』に、「土人とヨーロッパ人とが交渉をはじめると、『必ず熱病、赤痢その他の疾病の移入に伴って、多くの人命が失われる』」という記述がある。彼が人口減少の問題に言及したのは、サンセンから聞いた人口減殺の事態を、この記述の一例証ととらえたからであろう。この記述はダーウィンのものではなく、J・ウィリアムという宣教師の著書からの引用なのであるが、志賀はそれを飛び越えて、「蓋し劣等人種が優等人種に接するとき」云々という結論へ走ってしまった。その意味で、この時点の志賀重昂は、優勝劣敗、自然淘汰の学説を、伝聞した事態へ短絡的に当てはめるだけの、公式主義的なダーヴィニストだった。

だがその半年後、同じ現象を「紀聞」で論じた、次の文章では、かなりニュアンスが異なっている。

サーペント号艦長ハムメツト氏は、今を距る三十三年前即ち西暦千八百五十三年一月、此のクサイ島に到りたるものなるが、其記事に拠れば、此島の土人は外国捕鯨船の寄着する毎に熱病に感染し、漸く全島に伝播して、人口為めに減少す、と。又今日サンゼン（ママ）の言に従へば、二ヶ月前より熱病痢疾盛んに流行して、土民多くこれに斃る、と。然らば即ち此疫疾こそ、この此島人口減殺の大源因には非さる乎の疑問、予が脳裡に浮泳したり。然れども、此の疫疾の原子たる植物動物孰れなるを問はず、果して此島に自発したるものなる乎、将た他方より輸入したるものなる乎、此れ亦一疑問なりとす。（中略）以上の事実を以てこれを推論するに、此のクサイ島に数十年前より数ば流行し、且現時気焔の旺盛なる疾病の原子は、此地固有自発のものに非ずして、外国船舶より輸入したるもの、の如し。而して、其寄着したる外国船舶の乗組人員は皆壮健無病なれども、若しこれと交接往来する時は、身躰羸弱なる土人は直ちに此れより疾病の原子を受くることならん乎。左れば、此疾病

こそ、実に此島の土人を滅殺するの大源因と謂ふ可きなれ。

クサイ島における人口の減少は、外国船舶の乗組員が持って来た病気に冒されたためだ。彼はまだ「免疫」の観念を知らなかったらしく、この発見から、壮健無病な外国船舶の乗組員／身躰羸弱なる土人、という結論に飛躍してしまった。だが、「人種の消滅」を「自然淘汰の大法」によって説明する、傍観者的な見方に、ある種の躊躇（ためらい）を覚えたのであろう。右の文章を『南洋時事』初版に収める際して、新に次のようなことを加えたのである。

然レバコレヲ疾疫ニ理由スルモ、コレヲ精神力ノ競争ニスルモ、劣等人民ハ優等人民ト交通セシ爾来肉躰上ニモ精神上ニモ幾多ノ錯乱ヲ生ジ、竟ニ短折夭死ヲ速キタルモノナルヤ明ケシ。嗚呼黄、黒、銅色、馬来ノ諸人種ハ今日ニシテ自ラ計ル処無ケレバ、竟ニ此世界ハ白哲人種ノ専有ニ帰セン。若シ大達人ナラシメバ単ニ世界ヲ愛スルノ大義ニ拠リ、黄、黒、銅色、馬来ノ諸劣等人種ヲ却滅シテ以テ白哲人種ノ全勝ヲ希望スルコトナラン。然レドモ吾輩黄色人タルモノ己レガ種族ノ滅亡ヲ解得スレバ、転タ其間ニ些少ノ痴心無キヲ得ザルナリ。我人毎（ママ）ニ白人種ノ跋扈強梁ニシテ威ヲ全世界ニ震フアルヲ観、且其壮図ヲ想望シ、時ニ或ハ自ラ貧弱国ニ生レ黄人種トナリテ世ニ出デタルヲ転タ恨ムノ感念無キ非ラズ、然レドモ是レ已ム可カラザルモノニシテ累世肺病遺伝ノ家ニ生レタルモノトナシ自カラコレヲ覚悟シテ可ナラン乎。既ニコレヲ覚悟シタルモノトセバ力ノ及ブ限リハ此ノ遺伝疾ヲ防禦シ己レガ性命ヲ保維スルノ策ヲ講ゼザル可カラズ。我輩黄人種ハ宜シク今日ニ当リ白人種ト競争シ之ヲ防禦シ、以テ吾輩（ママ）種属ノ性命ヲ保維スルノ策ヲ講ゼザル可カラズ。我輩日本人ハコレト競争シ、コレヲ防禦シ、以テ国旗ノ性命ヲ永遠ニ保維スルノ策ヲ講ゼザルベカラズ。（傍線は亀井）

傍線の箇所は必ずしも分かりやすいとは言えないが、おそらく彼が言おうとしたのは次のようなことであった。つまり、「もし自分たちが、優勝劣敗、自然淘汰は、避けがたい自然の大法則であると達観するならば、自分たちが『黄人種』に生れた事実を甘受し、早晩滅びるべき運命に安んじて従うことになるだろう。だが、むしろ『黄人種』に生れてしまったからこそ、自分たちは全力を挙げてこの運命に抗い、種族維持の策を講ずるべきではないか」と。

この解釈は正しいと思うが、もしそうならば、彼は、人種決定論とでも言うべき宿命観に陥りかねない、優勝劣敗論に対して、反噬と抵抗に踏み出していったことになる。当然この反噬と抵抗には、「白人種」の優越というイデオロギーにはまっていた自分自身への反省が含まれていたはずであり、やがて彼は、『南洋時事』の増補三版（明治二二年十月）で、傍線の箇所を次のように書き換えてゆくことになる。

予輩毎ニ白人種ノ跋扈強梁ニシテ威ヲ全世界ニ震フアルヲ観、且其壮図ヲ想望シ、時ニ或ハコレヲ欽羨スルノ観念無キニシモアラズ、然レドモ徒然トシテ彼等ノ盛事ヲ欽羨スル是レ豈ニ予輩ノ為ス処ナランヤ。

『南洋時事』のむずかしさは、一方では、このように、白人中心主義の優勝劣敗論を批判し、そこからの脱皮をはかりながら、しかし他方、「又此土人（新西蘭の『マヲリ』）ノ年々減少スルコトハ猶我ガ蝦夷人ノ減少スルガ如キモノニシテ、太ダ愍ム可キニ似レドモ、所謂優勝劣敗ノ作用ナレバ将タ誰レヲカ咎メン乎」というような箇所を残していることである。

他者（志賀が言うアングロ・サクソン民族）の植民に対する過敏な反応と、自己の植民地に関する鈍感な現状肯定とが併存していたわけで、このように多義的なテクストの場合、そのいずれに注目するかによって、評価が変わ

らざるをえない。そして、後者から前者を捉えかえすならば、結局彼の優勝劣敗論批判は「黄人種」中心主義、というよりは「大和民族」中心主義でしかなかった。その点は否定できない。ただ、白人中心主義的な優勝劣敗論に対する、彼の批判が、クサイ島先住民の運命を媒介にしたものであったことも、また見落としてはならないであろう。

またそれと共に、この認識変化が、書き換えを通して起ったことにも注意する必要がある。この書き換えはクサイ島における直接経験（の記憶）の再解釈というだけでなく、以前の発言に対する反省と自己批評としても行なわれ、その意味では過去の自分との対話の結果であった。

この媒介と対話があればこそ、彼は、先住民の状況に関するダーウィンの無関心や、鈴木常勲の『南洋探検実記』（博文館、明治二五年）と『南島巡航記』（経済雑誌社、明治二六年）に見られる蔑視とは異なる、人間的な理解を書き込むことができたのである。

（二）「山水」「風土」の発見

その対話性が記述の仕方に現われてきたのは、「濠洲夢物語」であった。彼は三月二十八日、オーストラリアのニュー・カッスルに着き、三十日、メイトランドに植物学者・ラモント氏を訪ね、翌三十一日はハミルトンの「技術博士」ウヰルソン氏を訪い、学校を見学するなどした後、四月四日、シドニーに入った。シドニー滞在中、『エコー』紙に寄稿したことは既にふれたが、「紀聞」によれば、ある夜、彼の夢に「濶眼大顱」の人物が現われ、「数遍の論文を　シドニー　エコー新聞に投寄したるものは夫れ孺子乎」と問い掛けた。そして「日本の現情」を教えてもらったことを謝し、「予も亦濠洲未来の大勢を説きて以て子が労に酬ひん」と、オーストラリア各州の状況や、フランスとの葛藤を語ったのち、次のように予言する。

且本国（イギリス）政府の諸殖民地を遇するや、百事甚だ寛容にして毫も圧政束縛抔云ふもの無ければ、濠洲人民の多数は本国と分離するを好まざる者の如し。斯くは謂へとも、今より五十年の後、今日濠洲にて出生したる幼童の漸く長じて五十歳になり、本国の風景を見ず、本国の文物を知らず、本国の親戚朋友も漸く死絶して唯濠洲の山水のみを愛し、濠洲の風土のみを喜び、本国を愛慕するの観念自ら消失するに到れは、或は一大変事の其間に発生すること無きを保つべからず。今日すら濠洲の少年は寧ろ英国人と云はれんよりは、濠洲人と呼ばるゝを以て面目なりとなすものあり。これを要するに濠洲諸殖民地の独立は早晩已む可らざるものにして、二十世紀の歴史上に一大出来事と称すべきは、蓋し南洋ノアングロ　サクソン民族の自立連合して新共和国を創造するの一事ならん

この記述には注目すべき点が二つある。一つは、この発話はオーストラリアに植民したアングロ・サクソン民族の立場からなされているが、その発話主体の容貌は必ずしもそれと合致しないことである。「濶眼大顱」（大きく見開いた眼と、巨大な頭蓋骨）という、どこか髑髏（しゃれこうべ）を思わせる、異形な容貌は、彼が劇的な構成において好んで登場させる「社稷（しゃしょく）（土地の神と五穀の神）」をイメージしたものであろう。オーストラリアの報告では、彼は先住民・アボリジニに言及することをしなかったが、ここにそのイメージを忍ばせたのかもしれない。「紀聞」の一章としてこれを書いた時、彼はすでにニュージーランドやフィジーを廻ってきていた。あるいはポリネシアンの祭に登場する、異様な仮面をつけた祭神の姿を借りたのかもしれない。ともあれ、そういう超自然的な何者かが彼の夢に登場し、いわばクレオールによる本国からの独立を予言したのである。

私が注目したいもう一つの点は、この「独立」というテーマであって、あの超自然的な何者かは「独立」の必然性を、「山水」や「風土」が育てた郷土愛というパトスに見出した。現行のオーストラリア史を見れば、独立運動

の背景には複雑な政治的・経済的な要因が働いていたことが分かるが、ここではパトスの一点に絞られていたのである。これは志賀にとってインパクトの強い発見だったのであろう。彼は『南洋時事』増補三版では、彼自身の言葉として、次のように敷衍してゆく。

> 濠洲ノ殖民実力ヲ蓄積シテ自カラ一見識ヲ立テ、之レト共ニ所在万般ナル囲外物ハ彼等ノ間ニ漸ク一種特種ナル国粋ヲ発達セシメ、此ノ国粋愈々発達シテ本国ノ事物ト愈々相隔離シ、本国ノ利害ト愈々相衝突ス。此ノ国粋ヤ一起シテ「濠太利ハ濠太利人ノ濠太利タリ」（"Australia for the Australians"）ノ喊声トナリ、再起シテ独立党（"National Party"）ノ団結トナリ、三起シテ濠洲列国ノ合縦（ママ）独立トナル、是レ濠洲殖民進化ノ次第ナリ
>
> 独リクヰンスランド州ノ独立党、ニュー、サウス、ウエールス州ノ濠洲独立協会ノミナラズ、亦夙ニ濠洲藩民協会（"Australian Natives' Association"）テフ強盛ナル非本国（ママ）旨義ノ一団結アリ。聞説ラク此ノ一会員ハ去ル宴会ノ席上ニ於テ本国女皇陛下ノ万歳ヲ慶賀センコトヲ拒絶シ、併セテ濠洲人民ガ本国ヨリ分離スルノ緊急ナルヲ昂然告白シタリト。

マサコ・ギャヴィンの研究[6]を借りて補足すれば、「濠太利ハ濠太利人ノ濠太利タリ」（"Australia for the Australians"）を唱えたのは、前のクイーンズランド州政府首相、サー・トーマス・マックレーズであり、彼の呼びかけは多くの人の支持を得て独立党（"National Party"）に結実した。だけでなく、精神的一体化の気運はニュー・サウス・ウェールズやサウス・オーストラリアや、ニュージーランドまで拡がっていった、という。それに先立って、濠洲藩民協会（"Australian Natives' Association"）が既にシドニーで結成されていた。

この団体と、濠洲独立協会や独立党との関係は明らかではないが、多分志賀にとっては「独立」という理念の一点で結びつき得るものだったのであろう。生まれ育った「山水」や「風土」に涵養された郷土愛、これが彼の「国粋」（nationality）だったのであり、いずれの団体に属する人たちもこの「国粋」を共有しているはずだからである。

（三）見られる「日本人」

志賀重昂は五月十日、ニュージーランドのウェリントンに着き、翌々日の十二日、汽車に乗ってビトーナへ行き、ギヤーという人物の凍肉製造所を見せてもらった。「紀聞」の「新西蘭日誌」によれば、そこで、次のような思いがけない経験をしている。

> 此の製造場を出で、其近傍なる新西蘭土人の屋舎に到る。屋舎はハイトイと名づくる蓑□（不明）を以て葺き、屋内方凡そ三間、地上に新西蘭亞麻（ニュージーランドフラックス）を以て編製したる数枚の席を敷き、此上に蓬頭乱髪の土人箇々蹲踞するを認めたり。此時会ま土人等は夕餐を喫し居たるが、魚肉と馬鈴薯を木盤上に載せ、男女幼童相集りて此盤を囲み、手攫みにて魚菜を摘み喰い居たり。土人皆跣足にして靴鞋を穿たず、裸躰にして犢鼻褌のみを腰部に纏ひ居るものあり、薄き繻袢のみを着するものあり、ブランケツトを全躰に纏ひて胡坐するものあり、共に何にがな解せぬ事を語り居たりき。予は即ち此間に入り、英語を以て礼を為し、種々の尋問を為したるが、土人中にて能く英語を解するもの、これが応答を為したりき。会ま寒雨蕭々として屋背に当り、茅葺の間隙より点滴蕭々として予が面髪に灑ぐ折しも、四面顧みれば、文身刮青の土人相連りて予を囲み失笑するものあり、摟指するものあり、中には人品骨柄の賤しからざるものありて、十数年前までには幾百の部下数十里の領地をも所有したるものもありなん。而して今日其所有地は悉く英国人の占領する処となり。これが所謂亡国の遺民なるかと思

へば、転た予が意をして促々たらしめたりき。此時予は日本より携へたる錦画数葉を土人の小児に与へて、予が此地に来りたる紀念となしたり。土歌中に亡国の歌あり重訳して曰く

ペケハが蝿は無惨にもマヲリが蝿を駆り尽し、ペケハが草は心無くマヲリが草を枯らしけり。ペケハ鼠は無情にもマヲリ鼠を喰み殺し、ペケハが播きし牧草は、打ち蔓延りて用捨無く、マヲリが日々の糧とする蕨薇草を枯らしけり。然れば獣や草に似て、マヲリが民もいつと無くペケハの為めに亡びなん[14]（ペケハとは外国人と云ふ義にして即ち英人を指したるものなり。マヲリとは土人が自己の人種を称呼するものにして、猶我蝦夷人の自からアイノと称するが如し）

意匠悲涼纏綿轍ち江州司馬が青衫を湿はしむるに足る。

長い引用になったが、ここで志賀は、自分を文明人の立場に置き、その眼差しをもって、「野蛮・未開」の先住民の習俗を観察しようとしている。ただ、大切なのは、「四面顧みれば文身剳青の土人相連りて予を囲み失笑するものあり」と、逆に相手から好奇の眼差しをもって見られ、それを書き込んでいることである。おそらくまだ文明／未開の観念に冒されていない彼らの眼に映っているだろう自分の姿、それを察知した、この自己相対化の視点は、彼が航海中に携帯した愛読書、『ビーグル号航海記』のダーウィンには見られない。先に紹介した広瀬武夫の『航南私記』はもちろん、鈴木経勲の『南洋探検実記』や『南島巡航記』などにも見られなかった。

ところが彼は、「紀聞」を『南洋時事』へ書き換えるに当って、先に引用したことの大半を削ってしまった。「土歌中に亡国の歌あり重訳して曰く」以下だけを残したのである。削ったのはそれだけではない。「紀聞」によれば、彼は五月十三日、マクナツプという人物の植物園を訪ね、帰途ハツト河沿岸の開墾場を見学してから汽車でハツト村に着き、トラツタムに泊まった。翌十四日は汽車でハツト村を発ち、正午にマスタートンに着いてクラツプ・ホ

テルに宿を取った。

午餐後、テヲリヲリの土人村落に至り其集会場を覧る。此集会場は土人等の相会して重要の事を評議討論する処なり。搆造（ママ）は純粋の土風にして内外共にトイトイ草を以て葺き、処々木柱を以て此れを支ふ。木柱には男女の面貌、陰茎、剥木舟、魚鳥等奇異怪妙なる彫刻を為せり。予は帽を脱して堂内に入り、四面を眺むれば、唯見る其幅員凡そ百畳敷計りにして、四隅の棟、柱には文身刳青せる人物、鮫（さめ）魚、フキア鳥等を彫刻せり。西隅に石柱を建て、傍に酋長某の画像を安置せり。予は此処に佇立したりける折しも、文身刳青の土人等はジヤパネー、ジヤパネーと連呼して予が前後を取り巻き、面髪を熟視して失笑するものあり、摟指するものあり、何にがな解せぬ事を喋々するものあり、フキア鳥の羽を贈与したるものあり、洋人風にて握手したるものあり。予がマヲリ人を見物に来りたるものなるか、将た見物されにきたるものにや、何れなるを知らず。マスタートンに還り、府書記及びワイラバラ毎日新聞記者ブラウン氏の案内に応じ書籍館、鮭魚育種場、博物館に到る。博物館出品中に漢訳の新約聖書馬太伝第十三章あり、符して日本の新聞紙と題せり。又我国の障戸に粘付する粉紙を日本の手巾と符せり。又以て此地人民の日本の事情に暗きを知る可し。旅館に帰り未だ幾何もなく一土人来りて、予を見ん事を求む。予は乃ちこれに接したるに、此土人は流暢なる英語を以て、吾輩の父老は生来未だ嘗て日本人を目撃したる事無し、因て今夜土人等相会して軍舞（土語にてハカと云ふ）を催ふし、以て足下を招待せんとす、切に足下の貴臨せられん事を希望す、と云ひたり。予は乃ち其厚意を謝し、黄昏より到らんことを訂約したり。夕餐後同宿の英人三名と馬車を駆り、再び其集会場に到る。此時土人等は既に六七十名許りも相集り、予の到りたるを見て直ちに踏舞を始めたり。三々五々群をなし、手脚を妙に振り、又両手を口唇に当てシシホホと音調を取り、テネ　テレ　マクと連呼して止む。終りて土人等は、通弁を以て、予に日本

の国歌を吟哦せん事を求めたり。因りて予は其招待の厚意を謝せんが為め「君が代は千代に八千代にさゞれ石の巌となりて苔のむすまで」の句を両回朗吟したるに、土人等は一声にドツト吹き出したり。既にして満場の土人は一整に声を等ふして長歌を朗吟したり。其音調、頗る我が仏僧の読経に髣髴し、昂低も無く抑揚も少く、殊に単一なるを覚へたり。夜も早や十一時を過ぎければ、予は土人等に其待遇の厚きを謝し、同行の三士と共に此席を辞しけるに、土人等は予等が後影を目送して大音を揚げ、何にやら解せぬ事を述べたりき。恐らくは惜別の意を表したる者ならん。正子馬車を駆り月を踏みて旅館に還る

これも長くなったが、『南洋時事』には採られず、しかし貴重な記録なので、あえて引用した。このような交歓のなかで、彼は再び「予がマヲリ人を見物に来りたるものなるか、将た見物されにきたるものにや、何れなるを知らず」という自己相対化の状況に置かれてしまった。彼がいかに自分を文明人にアイデンティファイし、博物学者を自認しようとも、観察対象であるはずの先住民からは、逆に「ジヤパネー　ジヤパネー」と好奇の視線を向けられている。シドニーの市民に、文明国の一員である自分を証明しようとした時に較べて、この場合のほうがいっそう剥き出しに「日本人である自分」に直面させられたことであろう。

その夜、もう一度「珍しい日本人」として招待され、三人のイギリス人と出かけたが、もちろん彼らの興味は自分にだけ向けられ、国歌の所望に応じたところ、彼らは「一声にドツト吹き出し」た。広瀬武夫や鈴木経勲ならば、これを侮辱と受取っただろうが、特徴的なことに、志賀は交歓の一興ととらえ、「土人等は予等が後影を目送して大音を揚げ、何にやら解せぬ事を述べたりき。恐らくは惜別の意を表したる者ならん」と解釈しているのである。彼らにとって、鳥の羽で飾ったコートは、部族の長たることの象徴だった。「フヰア鳥の羽を贈与した」のも、単なる好意以上の敬意の表現であっただろう。志賀はそれを感じ取ったのかもしれない。

その翌日の十五日、彼はハツト村を発ったが、「此時予が旅館の前に土人四五十名程も立ち駢び居たりければ、予は其意を傍人に尋問したるに、単に足下が日本人なるを以てこれを奇なりとし見ん事を求むるなりと云ひたり。因りて予は戸外に出で一々これと握手したりければ、土人等は皆欣然たるの状をなしたりき」。

そうして彼はウェリントンに向かい、途中、下ハツト村で汽車を下りて、「土酋ウイタコ氏」と合い、前章で紹介したような会話を交わした。

その会話内容を繰り返す必要はないだろうが、再びマサコ・ギャヴィンの研究[6]を借りるならば、Wi Tako (Wiremu Tako Ngatata) という人物は、一八四二年、タラナキ部族とヌガティ・アワ部族の首長となり、マオリと入植者との調停に努めて、両者から高い尊敬を得、一八七二年、マオリとしては最初の上院議員として立法評議会員に選ばれた。他方、先住民評議員会のメンバーでもあった。一八七三年、先住民保護地区法案 (Native Reserves Bill) が立法評議会に上程された時には、「我々の土地や家屋の問題は理事会の手に委ねられるべきであって、マオリとヨーロッパ人とが異なる扱いを受けるようなことがあってはならない。こんな法案が可決されることには耐えられない」と強烈な反対意見を述べた、という。

この人物が志賀に「日本ニテハ英国人ト戦争ヲ為シタル事アリヤ」と訊ね、志賀は先に紹介したように、日本が独立を守り得た経緯を語ったわけだが、彼は、「我国ノ滅亡ヲ早ク速キタルハ単ニ英人ト戦端ヲ交ヘタルニアリ、戦ヒテハ敗レ敗レテハ其蚕食ヲ被リ、竟ニ今日ノ状躰ニ至リタルモノナリ」と悲憤慷慨の様子だった。彼はこの対話の一年後に亡くなっている。

志賀はこれを聞いて、「嗚呼日本モ亦竟ニ新西蘭ナル哉。亡国ノ箕子天ヲ仰ギテ咄々ト呼ブノ秋モアランカ。嗚呼予輩日本人民ハ新西蘭ノ宗社覆滅ノ活劇ヲ目撃シテ、心私ニ猛省スル処無カル可ケン哉」と、危機感を募らせた。

いわばWi Takoの悲憤を受けて、維新の志士的なパトスを表出したのである。彼は再版で、藤田彪（東湖）の「天地正大氣、粋然鍾神州、秀為不二嶽、巍々聳千秋、注為大瀛水、洋々環八州、発為万朶桜、衆芳難与儔、凝為百煉鉄、鋭利可断鏊」という詩を書き加えた。そのパトスを更に鮮明に表現するためだったのであろう。

先に引用したような貴重な経験を『南洋時事』から削ったのは、先住民から楽しまれてしまった自分の姿を隠すためだったのかもしれない。あるいはその逆に、先住民に対する読者の無知な蔑視を防ぐためだったかもしれない。そのいずれでもあったと解釈することも可能だが、一つ明らかなのは、先住民の最も優れた代表とも言うべきWi Takoとの対話のみを残し、それを通して、維新の志士のパトスに自分をアイデンティファイしたことである。

そしてここが重要な点なのだが、『ビーグル号航海記』のダーウィンも、広瀬武夫以下の人たちも、植民された先住民を、自分の見解を持つ、自立的な発話主体とする書き方をしていなかった。多分そのような発想は、彼らには思いもよらぬことだったのであろう。

（四）病める「旧開国」と清浄な「新開国」

以上は『南洋時事』より削除された箇所から読み取れる特徴であるが、では、書き換えと追加からどのようなことを読み取ることができるだろうか。

『南洋時事』執筆の際、新たに書き下ろした「義爾徳斯彌斯（ゴールドスミッス）氏ノ荒村感懐（"Deserted Village"）ノ詩ヲ読ミテ感アリ」によれば、彼は「土酋ウイタコ氏」と会ったのと同じ日の、五月十五日――多分Wi Takoを訪れる前に――ハット村の郊外を散歩した。「樹色既ニ霜ヲ帯ビ百花尽ク落尽シ」た中に刺鬣瓜（ハリエニシダ）（Furze）が咲き乱れているのを見て、オリバー・ゴールドスミスの長詩『見捨てられた村』（Oliver Goldsmith's "The Deserted Village"）の記憶が、鮮やかに甦った。

「ゴールドスミツス」氏ガ荒村感懐ノ詩中（"Furze unprofitably gay"）ニ此花ノ事ヲ咏ズルモノアリ。因テ懐フ「ゴールドスミツス」氏ノ此作アルヤ、蓋シ「アウバーン」村ノ農夫ガ漸ク其家ヲ破リ産ヲ失ヒ、田園ハ富豪家ノ兼幷スル処トナリ衣敝レ食尽キ、竟ニ家ヲ掣ゲテ天涯万里ノ新邦土ニ移住シ、参商離隔ノ異境ニ散乱スル痛絶哀絶限リ無キノ纏綿ヲ其筆ニ訴ヘタルモノナリ。

ゴールドスミスは、札幌農学校時代以来の愛読書だった。彼は、志賀が言う『荒村感懐』（"Deserted Village"）という長詩おいて、Sweet Auburn という共同体の質朴で満ち足りた生活を唱い、だがそこに、都市化の波が――富の集中と、拝金主義や人心の驕慢化などが――押し寄せて、農村を荒廃に追い詰めてしまった様子を、まがまがしいイメージで描いていた。志賀が手にしたと思われる "Select Poem of OLIVER GOLDSMITH"（NewYork, 一八七五年）のイラストレーションは、享楽的な都会風俗と、その都会の暗い片隅に病み疲れた身を横たえる、農村から流れて来た百姓女、そして荒廃した世界の比喩とも読める大蛇、猛獣が描かれていて、志賀のイメージ的認識を助け、深めていったのであろう。彼は産業革命後のヨーロッパ社会における社会矛盾と荒廃を次のように描いている。

蓋シ近年欧洲各国ニテハ虚無、社会、共産、無政（ママ）等ノ主義、中等以下ノ人民ノ間ニ行ハレ、動モスレバ社会ノ平和安寧ヲ傷毀スルモノ甚ダ尠シトセズ。其源因タルヤ、半熟未入室ノ教育ヲ受ケタル人民ガ漫ニ過激極端ノ理論ニ心酔シテ無道無理ノ主義ヲ懐抱シ、竟ニ此ノ悪結果ヲ誘致セルモノナリト雖モ、其主要ナル大源因ハ抑モ彼レニ非ズシテ此レニアリ。即チ旧開国ノ状態ヲ視ルニ、人口ノ増殖スルニ比スレバ事業甚ダ進暢セズ、労力ノ供給益増加シテ其需用随テ減少シ、労力ノ競争者愈出デ、其賃金愈低ク、生計愈艱難ナリ。是ニ於テカ這輩ハ事々物々皆不平不満ナラザルハ無ク、富者ヲ瞻望シテハ徒ニ其達意ヲ歆羨シ是ト比較シテ自己ノ落魄ヲ

長嘆シ、竟ニ一片不平不満ノ気ハ精忌(ママ)嫉妬ノ念ト化シ、漸ク長ニ敵シ上ニ抗スルノ悪意ヲ発生シタルモノナラン。而シテ此不平不満ノ私念ハ今ノ社会ガ上下相転倒スルニ非ザルヨリハ、到底已ムベカラザルモノナリ。（中略）又旧開国ニ於テハ人口ノ稠密ナルヲ以テ土壌ノ残余特ニ尠ク其価随テ貴シ、然レバ農家ノ規模モ亦自カラ偏少ニシテ其利潤随テ豊カナラズ、且土壌ノ残余乏シキガ故ニ漸次山林モ伐採シテ新田園ヲ開墾セザル可カラズ。然レバ山林伐採ノ結果ハ水利ノ涸欠、地質ノ痩薄ヲ促シ、遂ニ土壌ノ生産力ヲ減殺スル事ナラン。是ニ於テカ農民ハ漸ク衣食ノ欠乏ヲ告ゲ、不平不満ノ念ハ共産、虚無ノ主義ト共ニ其間ニ発生セザルヲ得ザルナリ。（中略）又旧開国ニ於テハ其邦土ノ故(フル)キガ故ニ千年ノ都市漸ク頽敗シテ汚穢不浄ノ物質自カラ其間ニ堆積シ、疫疾ノ原子ヲ発育スル事アリ、寧ロ新開国ノ山幽ニシテ水清ク大気新鮮ニシテ瘴霧少ク事々物々悉ク清浄潔洌ナルニ若カザルナリ。是ヲ要スルニ旧開国ニ於テハ人口愈増殖シテ生計ノ程度愈艱難ヲ告ゲ、其結果ハ貧窶、悪行、破廉恥、放蕩、自棄、疾病、癲狂ヨリ一般社会ノ錯乱ヲ促シ、漸ク倫理ノ凌夷退歩ヲ誘フニ至ル。而シテ此レヲ救済シ此レヲ矯正スルハ、唯這輩無産ノ生民ガ新開国ニ移住シテ衣食住ノ欠乏ヲ補充スルノ一法在ルノミ。

これもやはり『南洋時事』の際に書き下ろした「濠洲ノ前途」の一部であるが、ニュージーランド植民の背景に関する認識もこれと同様だったであろう。オーストラリアやニュージーランドの植民を正当化し、その成功を称揚するために、ことさら「旧開国」の行き詰まりを強調した傾向が見られないわけではない。ただ、何事に関しても西洋諸国の先進性が肯定的に語られることの多かった、この時代、一人の青年がこれほど的確に産業革命のネガティヴな面を洞察し得たことは、注目に値する。

この洞察を導いたのはゴールドスミスの『荒村感懐』（"Deserted Village"）であるが、もう一つは、マルサス『人

口論』に触発された、人口／生産の観点だった。このことは「旧開国」の社会矛盾を、「人口ノ増殖」「人口ノ稠密」という、ポピュレーション・プレッシャーの問題としてとらえていたことから推測できる。それだけでなく、「人口保持力」（Population-supporting Capacity）の視点でニュージーランドの将来を論じていたからである。

この観点に拠って彼は、日本の自然・立地条件を、「環海千里、纜ヲ繋クベキノ港、碇ヲ投スベキノ湾沿岸ニ出入リシ、土地限リアリ、人口限リ無ク、労力賤クシテ石炭余リアリ」（「新西蘭と日本」）ととらえ、将来日本が直面するだろう問題を、「異日内地雑居ノ約成リ、全国ヲ挙ゲテ開放セン乎、（中略）東印度人来リテ其至廉ノ労力ヲ以テ下等社会ト競争シ、支那人来リテ人力車夫社会ト競争スレバ、三十年後ノ日本ヲ如何セン」（同前）と描き出した。彼が外国人労働者の流入を予想し、日本が直面するだろう問題をこのように描き出した、その経験的理由は、サモアにおいてドイツの拓殖会社が大量のインド人労働者を使役している事実や、ハワイにおける「国内ノ雑商業、雑農業ハ悉ク支那人ノ手ニ属シ」という現実を目撃してきたからであろう。それを危機感に変えたのが、マルサスふうの人口論であった。

その意味で、彼の危機感は半ば観念的なものだったわけだが、しかしその視点があればこそ、彼は、「近年欧洲各国ニテハ虚無、社会、共産、無政等（ママ）ノ主義、中等以下ノ人民ノ間ニ行ハレ、動モスレバ社会ノ平和安寧ヲ傷毀スルモノ甚ダ尠シトセズ」という社会不安の問題を、「其源因タルヤ、半熟未入室ノ教育ヲ受ケタル人民ガ漫ニ過激極端ノ理論ニ心酔シテ無道無理ノ主義ヲ懐抱シ、竟ニ此ノ悪結果ヲ誘致セルモノナリ」ととらえることができた。ばかりでなく、この現象論を更に一歩進めて、「其主要ナル大源因ハ抑モ彼レニ非ズシテ此レニアリ」と、先に引用したような社会矛盾の問題にまで立ち入ることができたのである。

彼は農学校の学生時代、ロシア・アナーキストのテロリズムに共感を覚え、民権運動への関心から、福島事件の公判を傍聴するため、わざわざ東京にまで出かけた。被告・花香恭次郎の弁論を聞き、「語々悲壮、衆皆な涙を攪

る、予も亦た泫然、以為らく異日不幸にして邦家の厄運に際せば予も亦た遂に是れ哉」[15]と感動している。この関心が、彼を、「歐洲各国ニテハ虚無、社会、共産、無政等(ママ)ノ主義、中等以下ノ人民ノ間ニ行ハレ」という認識に導いたわけだが、ヨーロッパにおける革命思想のリアリティに言及した文章としても、これは最も早いものであった。

ただし、この時の志賀はそれらの思想運動に必ずしも同調的ではなく、むしろ否定的であった。先の共感とは矛盾する反応に見えるが、否定の焦点は「半熟未入室ノ教育ヲ受ケタル人民ガ漫ニ過激極端ノ理論ニ心醉シテ無道無理ノ主義ヲ懐抱シ」というところにあったのだろう。これは、日本の言論家に対する「世ノ壮士ヨ、旅館ノ二層楼ニ在リテ徒ニ空々タル妄想ヲ抱キ欲呑支那四百州ノ句ヲ誦ンゼズシテ、請フ徐ニ図ル処アレヨ。漫ニ空中ノ城楼ヲ築クコト莫レ。漫ニ国姓爺ヲ学ブコト莫レ。漫ニ山田長政ヲ学ブコト莫レ」という批判と対応する。要約して言えば、「現実を踏まえない議論や行動に走るのではなく、まず何が自分をそういう議論や行動に駆り立てているのか、その情念(モティーフ)の現実的な根拠を認識せよ」ということであるが、彼にとっては「人口保持力」(Population-supporting Capacity)の理論が、現実的な認識の視点だったのである。

H・B・レベデフ[16]によれば、「マルサスは、貧乏と資本主義的搾取のテロを自然法則として正当化した」という。プロレタリアートの貧困化の問題を、「人間は等比〔幾何〕級数的にふえるが、生活資料は等差〔算術〕級数的にしか増大しない」と、過剰人口の問題にすり替えてしまったからである。同じ眼で見れば、志賀重昂が「旧開国」の病根を以上のように指摘し、「此レヲ救済シ此レヲ矯正スルハ、唯這輩無産ノ生民ガ新開国ニ移住シテ衣食住ノ欠乏ヲ補充スルノ一法在ルノミ」と論じたことも、植民主義的進出を「自然法則として正当化」したことになる。

事後論断的には確かにそう言えるだろうが、当時の読者にとっては、「旧開国」の病根を教えられた意味のほうが大きかった。先住民を冒した疫病が、「千年ノ都市漸ク頽敗シテ汚穢不浄ノ物質自カラ其間ニ堆積シ、疫疾ノ原

子ヲ発育スル事アリ」という社会的疾病に淵源することを、知ったからである。そういう「旧開国」と対照させてみるならば、「寧ロ新開国ノ山幽ニシテ水清ク大気新鮮ニシテ瘴霧少ク事々物々悉ク清浄潔洌ナルニ若カザルナリ」。「新開国」と「旧開国」との対比を、新鮮・清浄な自然／汚穢不浄に淀んだ社会的疾病、という対比に置き換え、新／旧の対比に新しいイメージを与える。喚起力に充ちた、この修辞が、当時の読者にリアリティを感じさせたのだ、と見るべきだろう。

ここで再び彼が刺鬣瓜（ハリエニシダ）（Furze）を眼にした場面にもどるならば、彼は先に引用した文章に続けて、次のように植民の成功を言祝（ことほ）いでいる。

> 氏ハ其詩句中ニ這般新開ノ邦土ヲシテ豺狼蛇蚊ノ巣窟トナシ、瘴煙瘴霧ノ充塞スル処トナセリ。然レドモ氏ノ死後一杯ノ土未ダ乾カザルニ、彼ノ「アングロ、サクソン」民族ハ遠ク南洋ノ新境土ニ移住シテ忽チ家ヲ造リ田ヲ興シ道路ヲ設ケ礼拝堂ヲ立テ学校ヲ開キ公会場ヲ建テ漸ク電線ヲ張リ鉄道ヲ敷キ、竟ニ完美完全ノ新邦国ヲ釀造シ、此処ニ彼ノ好（スウキー）「アウバーン」村ヲ移置シテ、今ノ濠洲、新西蘭ヲ成立セリ。然レバ「ゴールドスミツス」氏ガ当初麦秀漸々ノ用ニ代ヘタル Furze ノ花ハ、却テ新移来住ノ人民ガ眼ヲ喜バシメ情ヲ楽マシムルモノトナレリ。吁嗟何ンゾ夫レ変遷ノ絶大ナル哉。

これもまた巧みなレトリックだったと言えるだろう。彼はたまたま Furze の花を眼にして、ゴールドスミスの長詩に親炙した札幌農学校時代の記憶を喚び覚まされた。ただ彼は、その記憶を語るのではなく、むしろ「記憶」という意識の過去志向と、それに伴う情緒を読者のなかに喚起する形で、この土地に移住した人たちの想いを感情移

入的に描いてみせたのである。「この人たちにとってFurzeは、失われた故郷を偲ぶ、かけがえのない機縁（よすが）であり、またそうであればこそ、新たに安住の地を得たことを喜び、幾多の辛酸と悲しみを癒す機縁（よすが）でもあるのだ」と。

辛い過去を甦らせつつ、現在の充足にその報償を見出す、あるいは失われた好（スウキー）「アウバーン」村の回復を確かめる。花に寄せて想いを述べる、伝統的な表現様式を借りて、彼は花の意味を二重化し、それを喪失と回復という物語の枠組みに変えて、好（スウキー）「アウバーン」村を追われた人たちの体験総体に形を与えたのである。

これは、好（スウキー）「アウバーン」村を追われてきた人たちにとっては、癒しの鎮魂歌だったと思われるが、彼らによって生活圏を狭められ、追われ、人口減少の危機にさらされてしまった人たちには、なお癒されない悲しみが残る。その悲しみを歌ったのが、あの「マヲリ」の歌だった。だが、その歌にも解消できないものが残るとすれば、それは別な形で言表化するしかないだろう。その言表化が、「土酋ウイタコ氏」の発話であり、後にふれる「『タンガロア』ノ神霊」の物語であった。

（五）「野蛮」観の変容

志賀重昂の乗った「筑波」は六月四日、フィジー群島中の「ヲヴアロー」島、「レヴカ」湾に入った。彼は八日、イギリス汽船「スヴ」号に乗ってフィジー群島を周航したが、先住民が「頗ル順馴ニシテ朴質愛ス可キ」人たちであることに感銘を受けた。彼は日本にある時、「『フヰジー』ヲ以テ喰人島トナシ其土人ヲ以テ獰悪凶暴ノ種属ナリ」と信じていたからである。この順馴・朴質はキリスト教の影響によるものと思い、九日夜、「ヴヰチー、レヴー」島の「スヴ」に行く途中、たまたま「ランガム」師という宣教師が乗り合わせていたので、訊いてみると、果たしてそうであった。

「野蛮人」が食人の風習を持つという噂は、福沢諭吉の『世界国盡』（明治二年）などによって拡がっていた。

彼は、文明の状況を大きく「文明開化」と「蛮野」とに別け、さらに「蛮野」を、「混沌」、「蛮野」、「未開」に細分化して、「混沌」については次のように説明している。「蛮野の内にても最も下等の民にて、鳥獣の仲間を外る、こと甚はだ遠からず、阿非利加の内地『新ぎんな』、『あふすたらりや』などの土人これなり。はてしもなく広き野原に徘徊して猟漁を業とし、或は虫を喰ひ、或は野山に生じたる木の実草の根を食物とす。其人の性質慈悲の心なくして互に相争ひ、物事に迷ひ易くして、人の道を知らず、甚はだしきは人の肉を喰ふものあり」（句読点は亀井）。

しかし志賀は既にクサイ島やニュージーランドで先住民と親しく接し、クサイ島のサンセンとは次のような会話を交わしてきた。「予はサンセンに問ふて曰く、汝外国人に対して仇讐の意ありや。答て曰く、否、彼等を見ること兄弟の如しと。予問ふ、島人は宣教師の来らざる前より上帝の存在するを確信したりや。彼答ふ、之を確信せり、土語にて上帝をネロクと呼べりと。又問ふ、主王死する時は酋長中にて之に代らんとて殺伐の所業ありや、又其位を簒奪せんとするものありや。答曰なし、主王死すれば其子之に代り、子なければ兄弟之に代ると」（「日記」明治一九年五月二十九日）。彼はこの会話と、「其婦女の懐胎の間は特別の保護を与ふ」などのことから、彼等の開化の程度を測っている。

この測り方から彼の「開化」観を知ることができるが、それは措いて、もう少し彼の見聞に即して言えば、彼はこの開化が、「米国宣教師スノー氏」の教化が及んだ結果であることを知った。その教化のおかげで、「残忍」な所業が跡を絶ち、「又布教の余暇を以て土人の少年子女に読書習字筆算等を教授するに付、島中の子女にて二十歳以下のものは能く英書を講読する由」という状態がもたらされたからである。フィジーで「ランガム」師に問いかけたのも、このような経験があったからであろう。

彼の理解が、依然として「混沌」→「蛮野」→「未開」→「半開」→「開化」という「進化論」的な枠組みのなかにあったことは、否定できない。この枠組みが、「此島（クサイ島）の土人の現状は決して社会最下等の人民に

非ず、我々の同胞なる蝦夷人抔より遥かに優等の民族なりと云ふべし」と、新たに「混沌」「蛮野」の民族を見つけ出す、つまり観念的に生産してしまう。その盲点に、彼は気がついていなかった。更にポスト・コロニアリズム的に言えば、宣教師が植民主義的侵略に果した歴史的な役割を、彼は「文明の教化」と評価することで免責していたことになる。ただ、それは彼の限界というよりは、むしろ時代的な観念の制約なのであって、重要なのは、彼がこの枠組みに対してどのような態度を取ろうとしていたのか、ということであろう。

先に名前を挙げた、彼と同時代人の「南洋」記録は、野蛮・未開の表象として、しばしば先住民の不潔と、強烈な異臭を挙げていた。例えばダーウィンは「ここに施されている異様な文身（いれずみ）が、容貌に不快な表情を与えていることは疑いない。（中略）その他に、眼にかがやきがあって、狡猾と凶暴とだけを示しているように見える。彼らの身辺も住居も汚らしくよごれて、悪寒を催した。体や衣類を洗う考えは、彼らの念頭に少しも無い」（ニュージーランド）と書いている。

広瀬武夫は「然れども優勝劣敗は数の免れざる処、白皙人種の渡来の多きに従つて、該ピアラス種族は漸く其数を減じ、終に全く無きに至らん。（中略）然れども此地方にして少なく共十年以内に開墾其利を収めんとせば悉く土蛮を撲滅して全く其迹を断たしめざる可らず。実に該地の土人は殆ど獣類なり。（中略）而して一種の日向臭き気あり。余輩は一見吐気を催さんとせり」（ニューブリテン）と嫌悪し、「土蛮の撲滅」を主張して憚らない。

鈴木経勲もまた「あまたの蝿身辺に近づき、目を撃ち、額に集まり、一々これを追い払うに遑（いとま）あらざるほどなりし。しかのみならず温風の徐々に吹き来たるたびに悪臭を送り、かつ余輩を囲繞せる土人もまた一種言うべからざる臭気を帯びたれば、心地悪しくしてほとんど嘔吐を催したりき」（マーシャル群島のウジャエ島）と、嫌悪感を隠さなかった。

志賀自身も、「日記」におけるクサイ島の場面では、「此島に一種の臭気あるは航海者の皆註す所にして、現に予

もトラザー、サンセン等と談話の際に彼等が好ましからぬ臭気を帯び居たるを感じたり」と書いている。だが、感性的な違和感を、先住民への否定的な見方に短絡させてしまうことはなかった。経験の自己把握がダーウィンたちと異なっていたのである。

このことと、先住民を発話主体として待遇するか否かとは、もちろん無関係ではない。ダーウィンは先住民と言葉を交わし、それを記録する発想を持たなかった。広瀬武夫や鈴木経勲は福沢的な先入観そのままに応対し、志賀のような関心とレベルで問いかける発想を欠いていたのである。

(六) 日本への警告

七月一日、「筑波」はサモア群島中「ウボル」島の「アピヤ」港に入った。ある日彼は「ムリヌー」岬まで出かけ、「国王ノ故居ヲ荒烟草蕪ノ間ニ訪ヒ、独逸人ガ其国旗ヲ植テタル故趾ヲ探リ、独国南洋会社ガ新ニ占領シタル地方ニ到リ、将ニ『アピア』ニ還ラン」とした。途中、耐えがたいほど眠くなり、「将ニ睡魔ノ界ニ堕ン」として、ふと気がついてみれば、傍らに人が立っている。その人物は「裸躰ニシテ洗足(ママ)ナリ、腰ニ犢鼻褌ヲ帯ビ手ニ木槍ヲ携フ」といういでたちで、彼に、「予ハ『タンガロア』ノ神霊ナリ。(『サモア』ノ国神。)」と名乗り、「汝ハ黄色人種ニ非ラズヤ。汝ニシテ初メテ予ガ満腔ノ不平ヲ訴フ可シ(中略)予ハ毎ニ独逸人ガ其強大ヲ恃ンデ予ガ本国ヲ遇スルノ方甚ダ宜シキヲ得ザルヲ憤フルモノナリ、請フ其顛末ヲ告ゲン」と話しかけてきた。

こうして語られたのが、「丹峨羅亜(タンガロア)神霊ノ夢物語」であるが、この簡単な紹介でも分かるように、この物語は謡曲の夢幻能に近い構成をとっている。旅の僧侶がある土地を訪れ、不幸な亡くなり方をした人の噂を聞いて、墓を詣でたところ、その夜の夢に亡くなった人物の亡霊が現われて、わざわざ弔ってくれたことを謝し、自分が死ななければならなかった経緯を告げる。彼はこの方法を借りて、先住民を、語り手として設定したのである。

語るところは、サモアの支配権をめぐる列強の植民地化抗争であり、『南洋時事』のなかで最も力の入った箇所であり、極めて詳細だった。鈴木経勲も『南洋探検実記』で同じ事件を記録し、中島敦も『光と風と夢』（昭和一七年）で、『宝島』の作者スティヴンスンの視点を通して、物語化している。それ自体、興味あるテーマだが、ここでは省略せざるをえない。

ただ、一、二注意しておけば、志賀の乗った「筑波」は、サモアの葛藤が一まず鎮静した、その直後に入港したことである。サモアでは、一方では、ここ三〇年来、国王の馬理埃托亞（マリエトア）と、これに対抗する多摩塞々（タマセ、）との葛藤が続き、他方、ドイツ政府は南洋貿易の拠点としてサモアを狙い、早くから「南洋諸島ニ於ケル独逸通商殖産会社」（Der deutschen Handels und Gesselschaft der Süd See Inseln）を設立して、開墾事業に当っていた「ヴェーベル」（Weber）を、サモア駐紮領事に任命した。軍艦「アルバトロス」号を派遣する。「ヴェーベル」は「アルバトロス」号の軍勢を率いて、国王を王宮から追い、「タマセ、」を王位に就けようと画策する。その動きを牽制するためにイギリスとアメリカが介入して、「マリエトア」の王位を確保し、英・米・独がその地位の保護に当ることになった。

このような形で決着がついたのは一八八六年六月八日のことであり、およそ一カ月後、志賀はサモアの土を踏む。抗争の余燼はまだ生々しく残っていた。彼は「布告文」における「中立亞比亞（アビア）領」という表現の、「中立」に注目し、「蓋シ国際法ニ所謂『ニーデルラツスング』ナル者ニシテ、移住地成立ノ原因如何ニ拘ハラズ、凡ソ移住者ガ協同ノ政治ヲ組織シ、且一人ノ首長ヲ撰ビ以テ結合住居スル者ヲ云フ。所謂英語ノ『セツトルメント』是ナリ」と解釈した。サモアの独立は形式的なものにすぎず、実態は居留地（セツツルメント）という形の植民地化でしかないことを見抜いたのである。

上海のような租界と、横浜のような居留地がおなじであるか否か。議論の別れるところであり、私自身は異なる政治的・経済的空間だったと考えているが、少なくともこの時の志賀のなかでは、アピア港と横浜港とが重なって

見えていたであろう。

もう一つ私が注意したいのは、「タンガロア」の神霊が、志賀に、「汝ハ黄色人種ニ非ラズヤ」と呼びかけたことである。神霊にとって、民族の悲運を語る相手は、黄色人種の青年でなければならず、それは次のような結びの言葉と対応する。

> 然レドモ「ヴェーベル」氏ノ志ハ尚未ダ衰ヘズ、且「タマセヽ」モ亦禍心ヲ包蔵シ私ニ米国保護権撤去ノ日ヲ待ツモノヽ如シ、然レバ「サモア」国ハ内憂外患交モ相薄リテ、其独立ハ到底保維ス可カラザルモノナラン。然レバ汝若シ恙無クシテ日本ニ帰ルノ日アレバ、汝ガ国民ニ知告スルニ我ガ「サモア」国ノ近事ヲ以テシ、宜シク其後来ヲ警戒シテ我国ノ覆轍ヲ踏マザランコトヲ是レ勗ム可シ

志賀はこの言葉を日本の読者に届けるために、夢幻能の構成を借りたわけであるが、この警告意識は更に強まり、明治二〇年十月の再版では、傍線の箇所を次のように書き換えていった。

> 然レバ汝若シ恙無クシテ日本ニ帰ルノ日アレバ、汝ガ国民ニ知告スルニ我ガ「サモア」国ノ近事ヲ以テシ、宜シク其後来ヲ警戒シ、徒ニ独逸風ニ浸漸シテ只管ニ「ビスマルク」翁ヲ崇拝シ、以テ一九世紀ノ大勢ニ逆ヒ、且日本ノ前途ヲ誤ランコトヲ是レ勗ム可シ

更に明治二二年十月の増補三版では、また次のように書き換えているのである。

汝若シ恙無クシテ日本ニ帰ルノ日アレバ、汝ガ国民ニ知告スルニ我ガ「サモア」国ノ近事ヲ以テシ、宜シク其後来ヲ警戒シ、徒ニ西洋風ニ浸漸シテ只管ニ西洋ヲ過信シ且拝崇シ、以テ生物進化ノ大勢ニ逆ヒ、且日本ノ前途ヲ誤ラザランコトヲ是レ勗ム可シ

この書き換えに、『日本人』（明治二一年四月創刊）の運動を興した彼のモティーフを読む事は容易であろう。分かりにくいのは、「生物進化ノ大勢」云々の表現であるが、再版で「新西蘭ノ酋長維太哥氏（ウキタゴ）トノ談話」の章に書き加えた、次の一節がその説明となる。

生物化醇ノ大則ヲ研究セヨ。勢力保存ノ原理ヲ研究セヨ。生物ハ一時ニ進化ス可キモノニ非ラズ。勢力ハ一時ニ儲蓄ス可キモノニ非ラズ。漸々徐々歩々行々一進一化一儲一蓄初メテ保存スルヲ得可シ。生物学ヲ研究セヨ。物理学ヲ研究セヨ。梁山泊裡ノ梟雄ニ倣フノ観念ハ輒チ消滅セン。生物化醇ノ大則ニ協フモノハ勝チ、協ハザルモノハ敗ル。勢力保存ノ原理ニ協フモノハ長ジ、協ハザルモノハ滅ユ。天地間ノ大法律大秩序ハ確乎トシテ動カス可カラズ。（中略）語ヲ寄ス、民間不平ノ志士才子ヨ、諸君ガ不平ヲ洩ラス其方アリ其法アリ、焉ンゾ水滸伝中ノ大碗酒ヲ飲ミ大塊肉ヲ喫スル豪傑ニ是レ倣フコトヲ用ヒンヤ。其方法トハ何ンゾ。興産企業是ナリ。

同じくダーウィン的な観念に拠ってはいても、既に優勝劣敗、自然淘汰を不可避の法則とする観念は消え、むしろその反対のモティーフから、「保存」「維持」による着実な「進化」が強調されている。この「進化」を支えるものが「興産企業」であることは言うまでもない。ここでの批判の対象は、「梁山泊裡ノ梟雄」を自負し、「水滸伝中ノ豪傑」を気取る「民間不平ノ志士才子」だった。先には、同様の批判を、「旅館ノ二層楼ニ在リテ徒ニ空々タル

妄想ヲ抱キ欲呑支那四百州ノ句ヲ」高唱する「壮士」たちに向けていた。彼の文体と内容は、このような「志士才子」や「壮士」を、仮定の論争相手として措定しつつ、作られていたのである。

(七)「王」の姿

「撒毛亞国王ニ謁スルノ記」によれば、彼は七月三日、サモア王を新殿に訪ねている。「殿内方凡ソ二拾畳計リ、床ヲ設ケズ、台ヲ置カズ、地上ニ木柱ヲ立テ覆フニ椰子ノ葉ヲ以テセリ」という粗末な「宮殿」だった。衛兵がいるわけでなく、いきなり王に面会することができた。この手軽さにふさわしく、王もまた「地上ニ珊瑚ノ砕殻ヲ藉キ席ヲ設ケ、大王裸躰ニシテ襦袢ノミヲ穿チコノ上ニ偃臥セリ」という具合だった。彼を見て体を起こし、何か話しかけたが、さっぱり意味が分からない。

彼はシェークスピアの『ヘンリ八世』の、'Tis better to be lowly born, / And range with humble livers in content, / Than to be perk'd up in a glistering grief, / And wear a golden sorrow.":(坪内逍遥訳「ほんとに、卑しい境界に生れて、下々の者と交際して、苦労せないでゐたはうが、ずっと優しですわねえ。金の冠をかぶって、燦々光る装をして泣いてゐるよりは」。第二幕第三場)という、女官アンの科白を連想した。さらに醍醐帝の運命を思い出して、『太平記』の作者ならばこんなふうに書くところだな、と考えた。

憂き節茂き竹椽、涙ひき無き椰子の檐、柴茸庵のあやしきに、軒漏る雨を禦ぎかね、苔の莚を片敷て、暫し身を措く宿となし、高峰の嵐吹落て、岸打つ波の凄く、夜の衣を返へせども、露の手枕寒ければ、昔を見なん夢もなし

「醍醐帝」はどうやら勘違いだ、と思い当たったらしく、再版では「後醍醐帝」に改め、ここに引用したように、振り仮名をつけている。文体は『太平記』のそれとは言えず、『平家物語』でもない。明治の『東洋学芸雑誌』（明治一四年十月創刊）や、竹内節編集の『新体詩歌』（第一集、明治一五年十月～第五集、同一六年〔推定〕）に、『太平記』や『平家物語』から有名な一節を取って、実験的な七五調の新体詩が発表された。むしろそれに近い。いずれも志賀の文学的な関心の広さを示すものであり、彼の漢詩はよく知られているが、和文の表現も、当時の新体詩の実情から見れば、余技以上の水準に達していたと言えよう。この表現は、落魄した「王」の立場に即した歎きの形をとっている。この表現能力が、他者を発話主体とする記述を可能としたのである。

ただし右はサモア王に拝謁した時の感想というよりは、『南洋時事』を書く時点での連想であろう。彼は落魄した姿の王に、流謫の悲しみを見て、同情の涙を注いでいたわけではない。彼が王の姿に見たのは、サモア人民の無気力であった。「国亡ビントスレドモ之ヲ憂フルコトナク、城破レントスレドモ之ヲ修ル無ク、優游閑適以テ一生ヲ送了セントス。宜ベナリ矣民風ノ柔且弱ナルヲ。予一絶アリ、君王所願在優游、不怪民風弱且柔、城破国亡甘屈辱、高宗今日獲良儔ト」。「王」の風姿、姿勢はそのまま人民の表象（リプレゼンテイション）なのである。ここから次のような厳しい糾問が発せられる。

> 果シテ南洋諸島ノ存亡ヲ慮リ布哇ト連盟共同シテ諸島合従ノ計ヲ画シ、以テ間接ニ自国ノ独立ヲ保維スルノ策アリヤ否ヤ。果シテ新西蘭植民政府ニ紹介シテソノ国庫事務長「ジユリヤス、ヴヨーゲル」氏ガ南洋策（Julius Vogel's South Sea Island Scheme）ニ加盟シ、自国ノ独立ヲ永遠ニ保維スルノ策アリヤ否ヤ。果シテ英領「フヰジー」植民政府ニ紹介シテ、南洋事件調訂会議ニ加賛シ委員長「サーストン」氏（「フヰジイ」（ママ）植民政府ノ代理太守ナリ。）ニ商議シテ、自国ノ独立ヲ保維スルノ策アリヤ否。果シテ米国太平洋汽船会社ニ紹介シ其航線

ヲ「パンゴパンゴ」港ヨリ「アピア」港マデ延長シ、以テ内外ノ往来ヲ迅速ナラシメ、進退活発絶ヘテ疎隔ノ憂ナク緩急忽チ警ヲ世界ニ告知スルノ策アリヤ否。

もちろんこれは彼のなかでのみ発せられた糾問であり、直接サモア王に問いかけたわけではない。それだけに、彼が「王」の資格・条件をどのように考えていたか、端的に表出されている。おそらくここに挙げられた四つの「策」は、彼がサモア王の立場に即して考えてみた、現実的な現状打開策であった。だが、サモア王はいずれの「策」も採ろうとしない。「白日『カヴ』ノ酒（土人ノ醸酒。）ニ爛酔シテ国事ヲ度外視シ、席上ニ偃臥シテ漸ク睡魔ニ堕ラントス。王モ亦想ハザルノ甚シキモノト云フ可シ」。

彼は、中国の歴史における宋の王・徽宗のエピソードを思い出す。徽宗は城を敵軍に包囲され、ほとんど虜われの身にありながら、毎日鷹の絵を描いて、鬱悶を晴らしていた。ある人間がそれを知って、なぜ決然と起って包囲網を破ろうとしないのか、と嘲った。だが、徽宗の描く鷹は極めて活発壮快、精気にあふれ、まさに飛翔せんとする気勢を見せている。「徽宗ノ微旨是ニ至リテ明カナリ。以テ亜細亜的帝王ノ本色ニ耻ヂズトナス」。打開策が見出せないほどの窮状にあって、なお打開の意欲だけは燃やし続けていること。これが志賀重昂の理想とする「帝王」の姿だったのである。

「筑波」は九月九日、ハワイのホノルル港に入った。彼の見たハワイもまた、名ばかりの「独立国」にすぎず、「政治財本ハ白人支那人ノ手ニ属シ……蝉（セミ）ノ脱殻（ヌケガラ）」の状態だった。このことは既にふれたが、明治二〇年十月の再版に書き加えたハワイの政変は、これもまた「王」論として読むことができる。

それによれば、明治二〇年（一八八七年）六月三十日、ハワイの人民がホノルルで大集会を開き、以下のことを

「国王カラカワ陛下」に要求することを決議した。一、現内閣を解散して、人民が指名する人士のなかから一人を選んで、新内閣を組織させること。二、現総理大臣兼外務卿のギブソンを追放すること。三、王が詐偽掠奪したアヘン専売免許料の七万一千ドルを本人に送付すること。四、王は一切議員選挙に干渉しないこと。ところが、ハワイ国王はその決議が決了する前に、先手を打って、名前の挙がっていた人のなかから一人を選んで、内閣を組織させた。だが、新内閣の内閣総理大臣兼大蔵大臣、外務大臣、内務大臣、陸軍大将のいずれも、西洋人の名前を持つ者ばかりだった。このため人民は満足せず、総代人を選んで、新憲法を起草し、七月五日、カラカワ王に捺印を迫った。「此ノ憲法ニ拠レバ、立法権ハ王ト国会トニ在レドモ、王ノ否認シタルコトモ議員三分ノ二以上ノ一致ヲ得レバ直チニ行フコトヲ得ルモノニシテ、国王ハ実ニ一定ノ俸給ヲ受クル所ノ一貴族ニ止マリ、政務ニ参加スル特権アル位ニ過ギザルガ如シ」。彼はこのように新憲法の性格を紹介し、カラカワ王がついに折れて、捺印に同意したことを、「布哇国人民ノ自由権力ハ真ニ偉大ナリト謂フベシ」と讃美している。

しかし、それでハワイの政情が安定したわけではない。「保守旨義（ママ）を執ル人々」が新憲法の成立根拠を疑い、他方、人民は、選挙権・被選挙権に財産上の条件がついていることに不満だったからである。王に批判的な人たちのなかには、次のような議論をなす者もいた。「『カラコワ王（ママ）』ハ国ノ憲法ヲ廃棄スベキ権力ヲ有セザル者ナリ。何トナレバ、国王ノ主権ハ憲法ニ因テ生ズル者ナレバ、其憲法ヲ廃棄シ或ハ改正スル等ノ事ハ全ク国王ガ権力ノ内部ニハ属セザル者ナリ」と。

彼はこのことを紹介した後、明治二二年七月三十日、「ウヰル、コックス」なる人物が、「土人ノ有志者数百ヲ率ヒ、王宮ヲ襲」ってクーデターを試みたが、アメリカの軍艦によって鎮圧されてしまったことを、注記している。

彼は日本の憲法と天皇との関係を論じたわけではない。だが、大日本帝国憲法が発布（明治二二年二月十一日）

されたのと前後して、このような情報を得、書き加えることを思い立った。そこに、彼なりの憲法論、国王論が託されていたことは、十分に読み取りが可能だろう。王たる者は人民の起草した憲法を承認しなければならず、また、王の地位はその憲法によってしか保証されず、当然その権力は憲法の制約を受ける。これはハワイのことであるが、時代が下れば「天皇機関説」として攻撃されただろうことを、彼は加えていたのである。

四　結語

およそ以上が『南洋時事』の内容だった。

彼はクサイ島の人口減少を「優勝劣敗」「自然淘汰」と傍観視することから始めて、経験を重ね、見聞を書く過程で、その観念にあらがうモティーフを掴んでいった。空間的な移動と、見聞を書き、書き換えるという内的な自己対話を通して、認識の変化と深化を進めていったのである。

その間、次第に明瞭なテーマとして現われてきたのが「独立」であった。「独立」という一点で、彼は、オーストラリアやニュージーランド植民者が起こした本国からの独立運動と、先住民の植民政府に対する反抗・独立運動とを、同一視してしまった。この矛盾に気がつかなかったのは、前者に「独立」のポテンシャリティを見出し、後者にその衰退を見ていたからであろう。ポテンシャリティを支えるものが、彼の言う「興産企業」であった。彼は「富国」を説いたが、「強兵」を主張することはなかった。むしろ反対だった。その代わりに彼は、「王」たる者の資質・姿勢・志を問題にした。彼の見るところ、それは人民の実情を映し出す鏡だったからである。「人民は自分にふさわしい王を持つ」。ヨーロッパのこの格言を借りて言えば、人民が「王」を作るのであり、「王」は人民の範

とならねばならないのである。

彼は札幌農学校の二年生の時、明治一四年十月二十五日に、明治天皇が一〇年後に国会の開設を約束した「聖詔」を読み、感激の涙を流した。その二カ月ほど前、札幌農学校は明治天皇の巡幸を受けている。国会と憲法に関する明治天皇のイニシアティヴ――少なくとも彼の眼にはそう見えた――と、ハワイ王の「醜態」は、彼のなかで鮮やかな対照をなしていたに違いない。彼の「国粋」観念に天皇の像は入っていなかったが、彼が「王」を、民族独立のポテンシャリティの体現者と見ていただろうことは、容易に読み取ることができる。

彼は南洋の先住民に、「独立」のポテンシャリティの低下・衰退を見ていたが、しかし蔑視したわけではない。先住民を語り手とすることは、少なくとも彼等を自立的な発話主体として待遇することである。だが、もやは「王」は民族衰運の歎きを語る言葉さえも持たず、彼は「神霊」の口を借りざるをえなかった。その言葉が日本に届けられる。

言葉を変えれば、それは民族の衰運を歎く歌には解消できない怒りと、「宗社」回復の意思表明でなければならなかったはずだが、あの「神霊」には回復の現実的な見通しが立たなかったのであろう、日本への警告に変えることしかできなかった。それは、志賀に見通し（を構想する意志）がなく、せめてもの心やりとして、日本の問題に転位し、自分たちに引きつけてみせるしかなかったことでもある。

それが過剰なほど日本の危機を警告する声となり、多分そのため、再版の附録に収録された「初版南洋時事諸新聞批評」を見るかぎり、同時代の読者がその声に動かされることはなかった。自分は独立国に住み、この独立が脅かされているわけではない、と思い込んでいる読者に、それはあまりに異質な声だったのであろう。長頭迂夫の「嗟呼何ソ其言ノ不吉不祥ナルヤ」、「余ハ唯之ヲ杞人ノ憂トシテ歯牙ニモ掛クルコトナカルヘシ」という反撥と冷笑が

よくそれを伝えている。志賀のモティーフに即してではなく、ただ論理的にだけ辿ってみるならば、確かに彼の思考には飛躍がありすぎたのである。

しかし彼はサモアやハワイから眼を離すことができなかった。ハワイについてどのように書き加えていったかは、前に紹介した。サモアについては、初版の末尾で、「本年（明治二十年）二月発兌ノ英国『ナイーンテキーン、センチュリー』雑誌第百八号」に載った、「シー、キンロック、クーク」氏の「サモア」嶋論に言及し、「『マリエトア』王ノ『サヴァイ』嶋ニ出奔シタル顛末ト、『ヴェーベル』氏ガ復タ独逸国旗ヲ『サモア』政庁ノ屋上ニ植テタ」ことを紹介している。

当時は、明治の教育制度で育った若い知識人が、海外に出かける場合、そのほとんどがヨーロッパとアメリカだった。また、当時の人たちが彼等に期待したのは、ヨーロッパやアメリカの新知識の輸入だった。そのなかで志賀重昂は「南洋」に出かけ、全く異質な情報を持ち帰ったのである。この点が読書人の関心を惹いたらしい。「我国人ガ眼界ノ少ナル、一度ビ眼ヲ西ニ注ゲバ又南北アルヲ知ラズ、近来少シク魯領ノ如キ北方ニ眼ヲ注ク者アレドモ、未ダ南方諸島ニ眼ヲ放ツモノナシ。独リ志賀氏軍艦ニ搭乗シテ南洋諸島ノ政治経済ヲ目撃シ、我国人ノ注意ヲ喚起セントス」（『金城新聞』）、「世ノ学士ノ多ク洋ノ外ニ航シ、政治法律理科何々等、百般ノ学問技術其他ノ事ニ就テ、帰国ノ後ニ世ヲ益セラル、モノモ少ナカラザレドモ、此書ノ如キハ其中ニ最タルモノ、如ク、我々ハ誠ニ其土産ノ滋養ノ効験多キノミナラズ（中略）洋行帰リノ諸君ニハ何卒イヅレモ此ノ如キ御土産ヲ頂戴イタシタキモノナリ。指間ニ金玉ノ戎指ヲ光ラシ襟辺ニ黄金ノ時計ヲ輝カシナガラ頭脳ハ蝉ノ脱殻ノ如キ様ニテ御帰国アルハ我々一向感服仕ラザルナリ」（『通俗学芸誌林』）。洋行帰りの軽薄な欧米かぶれが目立ってしまうほど、実学的な「南洋」情報は異彩を放っていたのである。

注

（1）高林公毅『私版　志賀重昂伝』高林公毅遺稿出版委員会刊、二〇〇一年九月

（2）亀井秀雄・松木博共編著『朝天虹ヲ吐ク―志賀重昂「在札幌農学校第貳年期中日記」』北海道大学図書刊行会、一九九八年六月

（3）志賀重昂「十年前録（一）」『亞細亞』第一巻第六六号、明治二五年十一月

（4）志賀重昂の「予は日本の事情を此地の人民に知らするは今日が好機会なるべしと思ひ英文にて『現時の日本』と題する数篇の論文を草しエコー新聞社に投寄したるに同新聞記者は此を六回に分ち毎土曜日の紙上に登録すべしと約し本月十日仝十七日の紙上に其一半を掲げたるを見たり」（「南洋巡航日記」『時事新報』明治一九年六月十一日）による。志賀は「現時の日本」の掲載を「六回に分ち」、と言っているが、実際には三回。

（5）猪瀬直樹『ミカドの肖像』小学館、一九八六年十月

（6）Masako Gavin, *Shiga Shigetaka 1863–1927: The Forgotten Enlightener*. Curzon Press, 2001

（7）（2）に同じ

（8）森久男「解説」、鈴木経勲著『南洋探検実記』平凡社、一九八〇年十二月

（9）前田愛「明治国権思想とナショナリズム――志賀重昂と日露戦争」『伝統と現代』第二〇号、一九七三年三月

（10）佐藤能丸『明治ナショナリズムの研究――政教社の成立とその周辺』芙蓉書房出版、一九九八年十一月

（11）矢野暢『「南進」の系譜』中公新書、一九七五年

（12）広瀬玲子「国粋主義者の移民論・植民論覚え書き」『歴史評論』五一三号、一九九三年一月

（13）水野守「志賀重昂「南洋」巡航と『南洋時事』のあいだ――世紀転換期日本の「帝国意識」――」『大阪大学　日本学報』二〇号、二〇〇一年三月

(14) 志賀重昂がどのテクストから「重訳」したのかは分からないが、Masako Gavin はこの「歌」を次のように翻訳している。

Pakeha flies cruelly have driven away Maori flies.
Pakeha grass has dried out Maori grass without affection to it.
Pakeha rats have mercilessly bitten Maori rats to death.
Pakeha weeds have spread everywhere unscrupulously,
And dried out Maori's kumara, their staple food.
Just like animals and grass, Maori will be destroyed one day.

(15) 志賀重昂「自由党と予」『新潟新聞』明治二八年十月十、十一、十三、十六、十七、二十、二十四、二十七、三十、三十一日

(16) レベデフ著・渋谷寿夫訳『ダーウイニズム』明治図書、一九六五年九月

(名誉教授)